
いみてーしょん

らんすろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いみてーしょん

【Nコード】

N2084G

【作者名】

らんすろ

【あらすじ】

20年ほど前から何の兆候もなく出現し始めた能力者達主人公の幸也もその一人、様々な能力者達と共に青春や平和な学園生活を求めて色々とやる。時には逃げて時には立ち向かいながら、仲間達と馬鹿騒ぎを起こす。

第一話

どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうしよう……………

洗面台の前で頭を抱えている、紅花^{べんはな} 幸也^{しんや}、15歳【男子】

幸也は顔を上げて鏡を見る、身を包むのは黒いブレザーの制服、幸也が今日から通う高校の制服だ。

そう今日から俺は高校生……………、新しい生活が始まる、きっと普通の人は楽しみで仕方ないだろう。

でも…………でも俺は…………、またも頭を抱えて洗面台に突っ伏す。別にHIKIKOMORIでも対人恐怖症でもない、高校に行く事、事態は楽しみだ。

だけど——その高校が問題だった……………。

20年ほど前から何の兆候なく人類に異変が起きた。

超能力者、世にそう言われる存在が現れ、急速に増えていった。今では全人口の10万分の1は超能力者だと言われている。

不幸か幸運か俺もその一人だ。

普通の人よりも運動能力、学力共に優れた能力者達。

そんな人間達のみが通う高校、黒羽学園^{くくは}、それに幸也も通うことになった。いいや、そうだった。

生徒全員が同じ能力者である、偏見も差別も何もない場所、普通なら喜ぶべき学園。

それでも幸也は絶対に行きたくは無い。

「絶対荒事に巻き込まれる……………」

これは予言——いいや確定事項と言ってもいい、
今までの人生で能力にかかわる事において荒事に巻き込まれなかつたことなど一度もない。

きっと強い能力を持った人たちに絡まれたり、嫌な思いをするに違いない……………。

そう確信できるからこそ、俺は学園に行くのが嫌で嫌で仕方がない。

現に同じ能力者であり、同じ学園に通うことになっている、幼馴染兼トラブルメーカーが約一名居る……………。

そんな中では、絶対に平和に暮らせるはずがない。

「はぁ……………」

深いため息の跡に顔を上げ、洗面台の鏡を見て気合を入れる。

「大丈夫……大丈夫、きつと何とかなる！」

「——なに鏡見て意気込んでんの、まさか…………ナルシストになっちゃたの?!」

「うおお！」

俺の背中を叩きながらナルシスト扱いしてくる奴を、俺は後ろを振り向いて睨む。

叩いた犯人はなお反省も何も無い表情でこちらを見ている。

「いきなり何だ、御影……………」

うえすぎ 上杉 みかげ 御影、俺の幼馴染だ。

ショートヘアの可愛い顔付きに元気そうなオーラを身に纏った

少女だ。

一見すると愛らしい美少女である、だけど幼児体系のつるぺったんだ。それに俺は知っているぞこいつがどんな子悪魔か！
憎むべきトラブルメーカーであるか！

「何って折角一緒の学園に通うんだから一緒に行こうと思って、誘いに来たんだよ」

はしやぎながら笑う姿は何とも可愛い、だがそんなことで見惚れてはいけない、コイツの行動と思考は最低最悪だ。

これ以上ここに居させると何をしでかさかわからない、中学生の頃にワックスなどの化粧品をダメにしゃがった事だってある。

「わかった、わかったから玄関で待ってろ、すぐに行くから」

「しょうがないなあ、玄関で待っててやるからすぐにこいよー！」

朝から元氣な奴だ……、しょうがない、ここは覚悟を決めて学園に行くべきか。

俺は一度部屋に戻り、鞆を手にしてから玄関に向かう、家には誰もいないので戸締りをして外にでる。

「それじゃ、いきましょーか」

元氣の塊の様にはしやぎながら歩き始める、本当にコイツは今日から高校生なのだろうか、もしかしたら小学生かもしれない。

にしても、こいつは怖くないのだろうか、能力者しかいないところが、

物凄い気性の荒い奴が襲ってきた入りするかもしれない……。

能力を使った喧嘩が日常茶飯事かもしれないんだぞ！

「幸也、またヘタレな事考えてたでしょ？」
「へ？」

何だいきなり——まさか俺の心のうちを読まれたか？
いいや、そんなはずはない、こいつがそんな器用な真似できるはずが無い。

「どうせ、能力者たちが大量に居て怖いんでしょ、顔に出てるよ！」

「そ……そんなことないからな」

ぐう……予想外だ、流石に付き合いが長いだけあって俺の考えはお見通しか……。

馬鹿の癖に中々やるじゃないか、俺のほうが学力は低いが。

「なーに、何かあったら私に助けを求めるといいよ！ どーんと任せなさい！」

主な荒事はお前が持ち込んでくるんだけどな、とは言わず、もしもの時の為に頷いておく。
そんな他愛も無い会話をしながら歩いて20分ほどすると学園に着いた。

「おー、この学園で何時見てもおっきいよねえ」

御影の言う通り学園は異常に大きい、通常の高校の二倍以上はゆうにあるだろう。

更に極最近できたものなので校舎もそれに準ずる施設もまた新しい。
そんな感想を抱いていると

「そつだねえ、御影ちゃんの胸とは段違いやね！」

公衆の面前でいきなりセクハラ発言をしたのは決して俺じゃない。

「誰の何がちっちゃいだつてえ？」

御影は颯爽と声の主の胸倉を掴んで威嚇する。掴まれたのは決して俺じゃない。

もし俺だつたらきつと掴まれた瞬間に拳が飛んできている。

「冗談やって冗談」

へらへらと笑いながらそこに居たのは俺の悪友、とうとうおれい藤堂曉だ。

二枚目の男前な顔付きと体格の良い体、そして能力者な為に運動も学力も良い、普通だつたらモテモテナ野郎だが。

セクハラ発言等が目立つ為にいまいちモテないそんな馬鹿だ。またも学力は俺のほうが低いのだが。

「次にそういつたら海の藻屑にしてやるからなゴラァ！」

いい加減、怒るのを止めてくれ御影、校門の前でそんなに騒がれると周りに居る俺も恥ずかしい……。

「さて、さつさとクラス発表みにいこか幸やん」

「そつだな、できればお前とは一緒にいいが御影とは遠慮しておこう」

「何！俺とが良いやつて……、いくらモテへんからって俺は男の趣味はあらへんぞ！」

「だれがそんな風に解釈しろと言った！」

たく……何で俺の周りには馬鹿ばっかなんだろうか……、類は友を呼ぶと言うが、決してそんなこと無いと信じたい……。
そんな俺と暁のやり取りを見ていた御影が何か悪戯をしそうな子供のような顔で見ている。

「あんまり騒がないでよー、周りに居る私まで恥ずかしいじゃん」

さっきまで騒いでた奴が何をいいがやる……、まあいい、ここは俺が大人になって静かにするべきだ。
それに反論したってまともに聞かないだろう。

「それじゃ、見に行きましょか」

暁の一声で動き出す俺と御影、このクラス分けで多分、今後一年間の運命が決まるといつても過言でないだろう。
俺はゆっくりとクラス分けの紙が貼られている場所の前に立つ。

目を閉じてそつと祈る。

「どうか……平和なクラスであります」

「ねーねー、三人とも一緒のクラスだよー!」

俺の祈りは終わることなく碎け散った。そうか……神は俺を甘やかしてはくれないか、別に信じてるわけじゃないが
こういう時だけは信じて憎んでやろう。

「諦めるこつたな幸やん、俺らと一緒のクラスな時点で平穏な日常なんて悪魔に食べられちゃったようなもんや」

「いや、まだだ、まだ分からない……、御影をうまく制御できれば平穏な日常は帰ってくる」

そうだ、あいつの興味をそそる様な事に近づけなければいい、そうすれば俺は平穏な日常が手に入る！
すぐさま振り向き御影を見て見ると……

「おい！ 突っ立てんじゃねえよチビ！ 邪魔なんだよ！」

不良だぞオーラを纏った長身の男が御影に絡んでる、ああベタ過ぎるベタ過ぎるぞ神よ！ あんたはそんなに俺が憎いか！
ダメだ、昔から短気な上、喧嘩っ早い御影がこんな暴言無視できるはずが無い。

だが、何としても喧嘩は防がなくてはいけない。

「誰がチビだつてえ？」

御影が不良気取りの男を威嚇する。

——無理だ、俺に今の状態の御影を抑えることなどできない、抑えようとするときつと暴れる。

そして俺はフルボッコにされてしまう。此処は暁に頼むしかない。

「止める——何としても止めてくれ暁……………」

肘で暁の脇腹を小突きながら小声で懇願する、入学初日から面倒ごとに巻き込まれたら、済し崩しにどんどん巻き込まれる。

だが、俺の考えがわかっていいるであろうに、暁は悪戯っぽい笑みを浮かべて戯言を吐いてくる。

「面白そうやから、このまんまでええんとちゃう？」

暁は明らかに面白がって御影を見ている、コイツに頼った俺が間

違いだった……。

そんな自らの間違いを反省している間にも御影と男はヒートアップしていく。

「チビが粹がつてんじゃねえよ！」

とうとう男の方が切れた、右手を後ろに引き——御影の居る方向に押し出す。

御影は危険を察知したのか、急に左に飛びのく。

——瞬間、手の向けられた方向から鈍い音と共に先ほどまで御影が居た地面が陥没する。

「うわぁ……………」

陥没した部分を見やり御影が声を漏らす。

あんなもん当たったら人間じゃ耐えられないな。まあ絶対に食らう気なんて無いが。

「どうだ、俺様の能力は！ 掌で圧縮した空気を押し出して目標物を潰す！ 最高だろうがよ！」

「相手に能力教えるなんて、馬鹿なんじゃないの？」

怖がる様子も無く御影は挑発する。

駄目だ、もう止められそうにも無い……………。

男は顔を真っ赤にして御影をより強く睨む。

俺は自分が犠牲になっても御影を止めなかったことに後悔する。

「今更謝ったってゆるさねえからなあ！」

気のせいだろうか、何だかこの男、思いっきり負ける人が言う台

詞叫んでるな。

そっちこそと呟き、御影も戦闘体勢に入る、男はまたも右手を後方に下げ、突き出し圧縮した空気を飛ばしてくる。

御影はその攻撃を横に飛びのくことで回避し次の一撃が来る前に一気に距離を詰める。

詰めた勢いを拳に乗せて男の鳩尾目掛けて殴る。

「おっし！」

確かな感触を感じたのか喚起の声を御影があげる。

隣でよわつちのおと無責任にもつまらなそうに呟く暁を俺は睨む。

よわつちいとかそういう問題ではない、喧嘩をしたことが問題だ。

「いえーい！」

こちらに向けて手を振ってくる御影、ほんと弱い不良っぽい男よ——え？

「こんなんでやられるかよ！」

男が急に動き出し、両手を後ろに下げ、即御影に向かって突き出す。

声に振り向いた時には御影の寸前にまで迫っている。

「もらったあ！」

男が腕を完璧に振りぬく、轟音と共に土煙が上がる。

暁は驚き、俺は呆然としている、それでも暁も俺もたいした心配はしていなかった。

「へへ……、どうなつても文句なんて言わせねえよ」

男は勝ち誇っているのかにやけている、その笑みが続いたのは、ほんの数秒間だけだったが。

それでもほんの数秒だけでも勝利の気分に浸れただけかもしれません。

「へっへえーん！」

土煙が晴れ、そこに御影が居ない代わりに声だけがある。

男は驚きを隠せない表情で叫ぶ。

（普通の能力者は）

「何処行きやがった！？」

「後ろだよーっとうお」

男が声を聞いた瞬間に振り向き、そのまま攻撃に入るが、御影は一瞬でその場から消える。

（御影に勝ったと思うことすら）

「嘘………だろ？」

とつさに後ろを振り向いた男が見たのは拳を振り上げる御影の姿。

「糞があー！」

男は後ろに振り向くと同時に能力を発動させ掌から空気を飛ばす。先ほどまで殴りかかろうとした御影はまたも消えるように居なくなり、

「ここだよーっと！」

（普通はできない）

男の頭上に現れる、そしてそのまま落下の力を利用し、頭上を仰いだ男の顔面に思いっきりドロップキックをかます。

ぐうと男は唸りながら地面に倒れる。男は悔しそうに着地を決めた御影を見上げる。

「へっへえーん、私の能力は高速移動だよ」

種明かしをしながらこちらに駆け寄ってくる。

さっき自分で能力ばらすのは馬鹿だとか言ってたか？ どうせ忘れているんだろうけど。

「高速移動？ 女？ お前……せんぷう旋風かよ……」

男は御影の事を旋風と呼ぶ、それと同時に今まで周りで見ていたほかの生徒達がざわめき始める。

旋風、それは不本意ながら広がった御影の二つ名。

二つ名は基本的に力が強くなお暴れん坊な者に付けられる能力を模した呼称だ。

簡単に言えば、問題児に付けられる不名誉なもののだが、問題児だらけの能力者の中では尊敬の眼差しで見えてくる野郎も居る。

「無駄に暴れやがって……」

どうせコイツのことだ二つ名が広まって喜んでるんだろう。

問題児になってなにが嬉しいんだか、まあ暴れ終わった時の心地よい疲労感には同意できるが。

「いーじゃん、勝ったんだし問題なし、気にしちゃ駄目だよお」

「二つ名付きつてばれた時点で問題なんだよ……………」

きつとコイツの近くに居たら俺まで問題児扱いだ、そしてコイツの荒事に巻き込まれていくんだア……………。

そしてばれたくも無い秘密もばれていく。

「まあまあ、怪我も無かったんやから別に気にせんでおけや幸ちゃん」

「お前が無駄に甘やかすからこいつが手の付けられない馬鹿になっちまったんだぞ暁！」

「馬鹿つて誰のことだぁおい？」

御影が能力を駆使して一瞬で近づき俺の胸倉を掴む、ちくしょういきなり能力を使うなんて反則だ。

もつと小さい頃からおしとやかさをコイツに求めていれば今頃は大人しかっただろうか？

「お二人さん、痴話喧嘩しとらんで講堂むかわへんか？ 人いもうなってるで？」

辺りを見回して見るが騒動が治まった同時に興味をなくした生徒達はとつくに居なくなっている。

講堂に向かって走り出す俺と暁。

御影はどうしたと振り向いた瞬間にはもう既に目の前に移動していた。

「うお！ 入学式でいきなり遅刻なんて真っ平ごめんだからな！」

「御影のはやっぱ便利な能力やなあ」

「そんなこと無いよあ、だってこれ使った後物凄い筋肉軋むし、まあ慣れたから平気だけどね」

無駄に体力ばっかありやがるから平気なんだなと悪態をつこうとしたが、

絶対に無駄な体力を消費することになるので口をつぐんだ。

第二話

「はあはあ……………何とか間に合ったな……………」

息を切らしながら講堂の中に入り指定されている自分の席に着く。なにやら男子が騒がしい……………まあ先ほどの事じゃない様だから気にしなくてもいいか。

にしてもまったく……………御影の馬鹿のせいで遅刻するところだった。

少しすると入学式が始まる。どうせつまらない話を永遠とするだけだ、聞き飛ばして適当に凄そう。

「新入生代表の挨拶、アリス・レーベルさんよろしくお願いします」

受験成績トップが挨拶をするが、日本人ではないとはまた悲しい気もする、まあこの学校は超能力者なら

何処の国籍のものだろうと受験できるためにこういふとが起こつても不思議ではない。

はい、と小さな声と共にゆっくりと新入生代表が立ち上がり歩き出す。

ステージに上がりマイクの前に立った少女を見て俺は視線を外せなくなる。

腰まで届きそうな白金の長髪、ステージの照明に当たり煌びやかに輝いているようだ。

色素が抜けてしまったような白い肌。幼さは残るものの整った顔つき、襟から覗く細い首筋と胸元の危うい魅力が

男子達を釘付けにする。

（綺麗だ……）

そう思わずには居られない風貌をした美少女、誰もが熱い視線を送っている、

だが少女の目には何も映っていないようにしか見えない、透き通っているようで濁っている様なものを感じる。

「新人生代表のアリス・レーベルです」

そこから短い挨拶が始まり、アリスに氣を取られている間に颯爽と終わった。

アリスがステージから降りた後も俺はぼけっとしていた。

何時の間にか入学式は終わり、生徒俺も含めては全員教室に戻り始める。

「おい、幸ちゃん、お前さっきアリスちゃんにみほれたやろ？」

ニコニコと満面の笑みを浮かべながら暁が耳元で囁いてくる。

「そ……そんなことないぞ、談じてない！」

「なーんや、折角いいネタ有ったのに聞かなくていいってこったな」

「良い情報って何だ？」

「なーにアリスちゃんに興味が無いお前さんには関係あらへんことよ」

「そんなこといわず教えやがれ」

「ほな有料な」

手の平をこちらに向けて現金を催促してきやがる、こいつまさか

此処まで計算してカマかけてきやがったか……。

「いいさ、そこまでして欲しい情報じゃあない、どうせアノ人とは話す機会だつて無いだろうからな」

「そうとも限らんかもなあ」

にたにたといやらしく笑いながら俺をじっとみてくるが、無視して俺は教室に早足で向かった。

まだ真新しい教室の中に入り自分の席を探して座る、席は名簿順かと思つたが違うらしく規則性無く並んでいる。

俺の席は教室の後ろの隅っこ、まさに端だ。俺の隣の席はまだ来ていないのか開いている。

「やほー、席近いね」

不意に声をかけて来たのは御影だ、どうやら俺の前の席らしい。

「神は俺に安息を与える気は無いらしい」

「どーゆーいみ？」

「気にするな、それよりもさっき暁が御影はつるぺったんだって広めてたぞ」

「シバいたいる！」

速攻で御影は消えていった、俺の安息の為にすまないが暁よ犠牲になってくれ。

「着席しなさい！」

またも前方から声が聞こえる、どうやら担任教師が来たらしい。教師は最低でも二十歳は過ぎている為に無能力者だ、能力者に囲ま

れてすごさないといけないなんて不憫だなあ。

「着席してつてばあー！」

………どうやら着席を命令している人物は教師では無かったらしい。

小さい……御影も小さいがそれよりも幼い。

「早く着席しなさい！」

高校生かすら疑う容貌の少女が声を張り上げて叫んでいる。それを哀れに思ったのか生徒達が次々に着席していく、御影も戻ってきて席に座る。

右手をハンカチで拭いているが、ハンカチが真っ赤な血の色をしているのはきつと元々赤かったのだと思うことにしよう、にしても暁がまだ教室に居ないな………トイレだと信じよう。

「えーと、まだ来ていない生徒も居ますがホームルームをはじめたいと思います」

なにやらさっきの幼児が教卓に座って教師の様な物言いをしている。

「今日から皆さんの担任になったミーナ・エーデルです、ミー先生って呼んでねー」

嘘だ——だって椅子に座ってるけど足が地面に届かずぶらぶらしているし、何か声も幼児っぽいし、こんな人が教師だなんてありえない！

クラスに沈黙が流れる。

「ミーナちゃんは本当に教師なんですかあ〜？」

クラスメイトの一人がとうとう真実を確かめに特攻を仕掛けたが、教師と名乗る謎の少女はその質問に答えない。

「ミー先生って皆さん呼んでくださいねー」

ミー先生って呼ばない限り反応しないということだろうか、先ほどの生徒がミー先生と言い直し同じ質問をする。

「そーですよあー、ミー先生はアメリカで飛び級で大学卒業してきたのでまだ幼いですが立派な先生です！」

「ちなみに年齢は？」

「女性に年齢は聞いちゃいけないですよー幸也君」

とつさに質問してしまった俺に優しく答えるミー先生、顔は笑っているが少し殺気を感じるのは気のせいだろうか。

「遅れやしたあー」

そこに暁が遅れてやってくる、顔がちよっとはれているが何も無かったことにしよう。

教卓の方を向き、驚いたように目をぱちくりさせながら、呆然とする。

「何やこのつるぺったんの少女は？ まさか教師とか冗談いわへんよなあー」

暁が再起動しへらへら笑いながら言う、それを聞いた瞬間にミー

先生のニコニコした表情が崩れ泣き出しそうになる。

「先生はつるぺったんじゃありません！ でっかくなるもん！ うー……」

「でっかくなるって、今はつるぺったんってことやる？」

叫びながら泣き出してしまう、それと同時に右手を暁の方に向ける。

「うう……暁君なんてだいつ嫌いです！」

叫んだ瞬間にミー先生の右手がバチバチと音を立てながら青白いものを纏い——暁に向けて発射する。

「ほえ？」

暁は理解不能と言いたさそうな声をあげた瞬間、青白いものを受けて——全身の骨が見えた。

「うへあ……」

暁がぶすぶすと音を立てながら黒焦げになっている、どうやらミー先生の手から出たのは電撃——それも雷並の電力だろう。

まだ半泣きのミー先生は黒焦げの暁は放っておいてなきながらホルムルームを再開する。

「皆さんは暁君の様に私を小さいなんていわないでくださいね」
『……………はい』

集まったばかりのクラスメイトの心が早速一つになった気がした。

「遅れました」

淡々とした口調で一人の女子生徒が教室に入ってくる。

「うお……同じクラスだったのか」

入ってきたのはアリス・レーベルだ、暁の言っていた良い情報とはこれのことだったのだろうか？

「校長先生達と話してきたんですね、話は聞いているので席に座ってください」

ミー先生がゆっくりと言う、やっぱり先生というよりも小学生のようだ、そんなこと言ったら
どうなるか解っているので決して誰もいわな――

「誰ですかこの少女は？ 先生は何処へ？」

言ってしまった……、アリスさんは悠然とかつ自然に言っている、クラス全員がアリスさんを凝視する。

それを不思議に思っているのか少し首を傾げている、その姿はとても可愛らしい、この異常な殺気さえなければだが。

「アリスちゃんまでそんなこと言っんですね……」

ミー先生がふるふると震えている、そして暁を屠った様に右手に電撃を溜める。

「アリスちゃんも、暁君みたいになっちゃえばいいんだあ！」

泣きながら右手をアリスに向け、電撃を放出する――が、アリスも両手をミィ先生に向け

「ま……わ……てよ」

何かを呟いた――その瞬間、アリスの両手の前まで迫っていた電撃が何かに阻まれる。

「不可視の盾?!」

今まで楽しそうに見ていた御影が驚きで声をあげる、此処に知っているの者は俺を含めて何人いるだろう、不可視の盾を持つ者の二つ名を、強さを。

「くう……やりますねアリスちゃん」

電撃を完全に防がれたミィ先生が悔しそうに呟く、だが能力に関して驚いている素振りはない。もしかしたら生徒全員的能力を予め知らされているのかもしれない、俺の能力も含めて。

「今の電撃、貴方が神童と噂される雷神ですね？　噂以上に小さいお方です」

平然とアリスさんが言う、雷様？　何処かで聞いたことがあるような二つ名だ。

だが、あれほどの電撃を放って対して疲れた様子も無い、あれが全力ではないのだろう。かなりの力があることは確かだ、神童には確実に賛同できる。

「また小さいって……、こ……今回は許してあげますから早く席に着いてください、私が先生です」

ようやく納得？　したのかアリスさんは歩き出す、アレ？　空いてる席って二つしかないな……、
ゆっくりと一つ目の空席を通り越してるし……、ドギマギしながらアリスさんを見ていると、ちょうど俺の隣の空席まで来る。
そしてアリスさんはゆっくりと俺の隣の空席に座る、暁よ良い情報つてのはこれが……。

「よ………よろしく………」

し………自然にだ、自然に挨拶しよう顔は嬉しさと驚きで引きつってたりしてない………よな？

「よろしくお願いします」

あちらも自然に挨拶を返してくれた、良かった………これで無視られていたら多分しばらくショックで動けなかった。

「それでは今度こそホームルームをはじめます」

ミー先生の合図と共に隣に意識を向けながらの長い長いホームルームが始まった。

第二話（後書き）

感想にありがちと書かれていたのですが

第二話もありがちなお話になってます……………。

ですが、まだまだ物語りは始まったばかりなので
がんばっていききたいと思います。

第三話

「はふう……………」

「どーした幸也、ホームルームしか終わってないよ？」

俺は机に突っ伏す、ホームルームの最中ずっと緊張のせいで精神が疲れた……。

アリスさんはホームルームが終わると何処かに行ったが、授業中も先ほどと同じ状態だと考えるとかなりきつい……。

「美少女過ぎるってのも問題やねえ」

ひょっこりと暁が現れる、お前大丈夫だったのか。

まあ今までにも散々酷い目にあってきてる奴だ、あの程度では全く苦に感じないのかもしれないな。

いいや——ただのマゾなのかもしれない。

「そうだな……、しょーじきつらい」

「何贅沢な悩み言ってるんだか……、美少女ならここにいるんだから慣れてるでしょ？」

「何処にそんな美少女がいるんだ？」

キョロキョロとワザとらしく周りを見る、だが視界に入るのは無理やり俺の視界に異常な速度で割り込んでくる御影だけだ。

「わざわざ能力使って俺の視界に無理やり入るなよ」

「幸也がワザとらしく視線を動かすからだもんね」

「そーっすか……、お前は能力ちよつとは自粛しろよ……」

「ふーんだ、幸也のように能力知られるの嫌いじゃないもんね」

「俺のは知られるといろいろと面倒なんだよ……」

「カッコイイ二つ名だつて持つてくるくせにい」

「ふん……二つ名つっても素性ばらしてないから通称みたいなもんだ」

はあ……不本意ながら俺の能力にも二つ名が付いてる……、まあ俺がその二つ名の持ち主だと知っているのは極少数だが。

ちなみに暁にも二つ名がある、ああ、完璧に問題児三人衆だ、こいつらと一緒にされたくないが。

「にしても幸やん、さっきのミーちゃんとアリスちゃん的能力どうやった？」

「……いきなりその話題か、ミー先生的能力は発動条件もリスクもなさそうだな、アリスさんの方はわからん」

「そかそか、お前さんの能力の足しになるといいな」

「俺は別にいらねえよ、使う気なんて無い、馬鹿みたいなことなんてしたくないからな、馬鹿にはなりたくねえし」

能力使って暴れる馬鹿になんてなる気は無い、目立ちたくもない。

「はい、授業を始めるので席に座ってくださいーい」

ミー先生の掛け声と共に生徒が集まり座っていく、当然アリスさんも席に座る。

また、気疲れする時間がやってきたな……。

ミー先生が担当するのは化学だ、小さいのに良く理解できるもんだ、隣のアリスさんは黙々とノートを取っている。

一時はどうなるかと思ったが、慣れるのは意外と早かった。

授業中に会話なんてしなれば良い、休み時間はまず話さないだ

ろう、俺と優等生の美少女が話すなんてありえない。
更に他の生徒とも話す機会はありませんさそうだ。

「はぁ……御影のやろぉ……」

小さく一人呟く、どうやら既に朝の出来事は広まったらしい、御影が旋風であることがバレた以上、仲良くしている俺や暁も結構な問題児に見られているようだ、完全否定できないことがまた悔しい。

「幸也君ー、聞いてますかぁ？」

「聞いてます」

ミー先生が俺が真面目に受けてないと気づいたのか注意してくるが適当に流す、能力者はだいたい頭が良い、だが俺は違った、どうしても勉強はダメなのだ、やる気が起きない。だから能力者というだけで入れるこの学園にしか入れないような頭の悪い奴になってしまった。

（御影や暁もあれで結構勉強できるからな）

御影の場合は勉強はできても性格上かなりのアホな為に知性が全く感じられない。

せめてもう少し賢くなって問題を起こさないでくれればいいが。

（せめてこれ以上現状が悪化しないことを願うしかないか）

俺は窓から澄み切った青い空を見ながら授業が終わるまでただ呆けて時間を潰した。

「おーい幸也ー、昼飯どーするの？」
「あゝ？」

入学式初日の授業は午前中で終わりだ、俺は一戸建てに親が海外を飛び回っているために一人暮らし、御影と暁は両親と住んでいるが、基本的に俺に合わせて昼飯を食べる。

「そーだな、適当に食って帰るか」
「おっけー、駅前のファミレスいこー」
「そやな、いこかあ」

鞆をもって俺たちは教室から出る、そのまま校門に向かい学園を後にし制服のままファミレスに向かった。

（どーせこの制服着てれば大人に注意されることなんて無いし、制服でもいいよな）

黒羽学園は能力者だけだ、そのために学園の制服を着ていると、能力者だと怖がられる。
無能力者の大人たちにとっては畏怖の存在でしかない。

「私オムライスね」

ファミレスに着いたとたんに御影はメニューを決める、暁はカレーライス、俺は何にしようかと悩んでいる間に勝手にラーメンに決定され注文された。

少しすると注文したものが来て、それを喋りながら食べ終えた。

「はあゝあ、つまんなーい」

「特にやることもないしな」

「んゝ、適当に暴れるか幸やん」

「馬鹿な事を言うな」

すぐ暴れたがる暁と御影をなだめながら適当に街中をぶらついて行く。

（確かに暇だ）

別に平和だからっていう訳ではない、やる事が無いから暇なだけだ、荒事を求めているわけじゃない。

「お！アレ可愛くない？」

「あゝ取ったるわ」

クレインゲームのぬいぐるみに興味を惹かれたらしい御影が颯爽とゲーム機に飛びつく。

暁がゆっくりと向かい、ぬいぐるみのゲットに精を出す。

「しばらくはアレで暇つぶしか」

御影も暁も俺も誰一人としてクレインゲームはうまくない、ぬいぐるみをゲットするまでそれなりに時間がかかるはずだ。

俺もクレインゲームを楽しんでいる御影たちのもとに向かう。

歩き出した瞬間に大音量のクラクションが道のほうから聞こえてくる。

驚き瞬間的に音のしたほうを振り向く。

第四話

そこにはクラクションを鳴らしたであろう走行中のトラックとその目の前まで接近を許してしまっている一人の少女が写る。

（御影なら……）

一瞬の思考、御影の能力ならば間に合う、だが御影はクレイーンゲームに夢中だ、こちらに気づいている可能性は低い。

（緊急事態……か……）

助けがないなんて選択肢はない、即時に判断し自身の能力を発動させる。

（イメージ
模倣旋風）

発動と同時に高速移動を開始する、鞆を投げ捨て、少女に衝突寸前のトラックの目の前まで一瞬で移動する。

そのまま少女を乱暴に抱きかかえ、トラックの目の前から脱出を図る。

（ギリギリか？）

一瞬危険を感じたものの何とかぶつかる前にトラックの目の前から脱出する、加速に耐え切れず前のめりに倒れる。

抱えた少女を地面にぶつけないように注意しながら背中から落る、背中に激痛が走るも少女には何一つ怪我はさせていない。

「いたあ……」

痛みの走る背中を摩りながら上半身を起こす、大勢の人々がこちらを向いてくるが無視する。

御影達が気づいたのかこちらに走ってくる、御影は速攻で暁は多少遅れて到着する。

「何無茶してんの?!」

御影が怒っている、その怒気にやられたのか抱えている少女が少しおびえている。

「わりいわりい、ちょっと人助けを……」

「それぐらい解ってるけど……いいの?」

御影の確認はきつと俺が能力をしようしたことについてだろう。

「まあお前の同類に見られてなければ平気だとは思う」

俺の能力は他人の能力や行動を完全に模倣することだ、能力の場合は一日に一回の回数制限が付くが、
普段はだいたいこの能力は使わない。

理由は簡単だ、正体がバレるのが嫌だからだ。俺が贗者である^{フェイカー}と。御影達と何度も荒事に巻き込まれているせいで俺の能力には贗者《二つ名》が付いている、ただ荒事の度に仮面をしたり顔を隠したりしていた為に贗者が俺だということはバレていない。だが今回のことではれる可能性が無いわけではない。
(助けたことに後悔はしてないんだけどな)

「まあ贗者だつてばれたいんならお好きに能力を使えばいいよ、どうなっても知らないけど」

「まあまあ御影もそんな怒らんとけ、幸やんの性格上、人助けに体が勝手に動いてしもうたんやろうから」

まるで人助けが趣味みたいな言い方だが今回は何も言い返せない。

それよりも先ほどから腕の中で丸まっている少女を
地面に座らせる。

「怪我はないと思うんだが何処も怪我してないよな？」

少女は小さく頷く、歳は8歳ぐらいだろうか？　だが近くには親
の影もないが、どういうことだろうか？

「助けていただいてありがとうございます」

「おゝ偉い偉い、ちゃんとお礼が出来るやん、御影とは大違いや」

「私だつて助けられたらいいってえの！」

「それが普通だからな御影」

先ほどまでこちらを見ていた野次馬達はいつの間にか興味をなく
したのか居なくなっている。

「さて、親とか何処かにいるか？」

流石に小さい子一人を置いていくわけにはいかない、また引かれ
かけるかも知れないし。

「此処には居ない」

首を横に振りながら呟く。

「んじゃ、どうやって此処にきたんだ？」

「車で来たんだけど、お姉ちゃんを見つけて追つていこうとしたら
気づいたら道に迷つてて」

「そうか、じゃあ車を運転してた人とかは何処にいるの？」

此処に親が居ないって言うのは車に居るからだろうか？
それとも祖父などと来て姉を見つけて車から降りて道に迷ったのだ
ろうか

「その人ならお兄さんの後ろに」

後ろ？ そんな気配は全くしなかったが俺は後ろを振り向く。

「うおお！」

そこには筋肉質の長身の黒服の男が立っていた、威圧感抜群なの
に気づかなかった何て情けない。

「お嬢様、勝手に行動しないでください」

「お姉ちゃんを見つけたからつい」

お嬢様？ 黒服の男といいどつかの令嬢様か？

「何処かのお金持ちらしいね」

「そやなあ、こりゃたまげた」

余り驚いた様には見えない御影と曉だった。

「それでは、失礼させてもらいます」

「助けてくれてありがとうねお兄さん」

少女はこちらに手を振りながら黒服の男についていった。

「何だっただが」

「さーねえ」

「ま、何でもいいやろ、クレーンゲームのぬいぐるみ取りにいいか」
「さんせーい！」

その後クレーンゲームに戻ったら狙っていた人形がなくなっており、御影に散々怒鳴られ謝りまくる事になった。
その後も適当に時間を潰して家に帰った。御影と家の前でわかれて中に入る。

「ただいまっ」と

誰もいない家だがこれだけは何故か言ってしまう。

リビングにいき、適当に持っていた鞆を投げ置く。そのまま二階の自分の部屋に向かう。

部屋に入り、すぐさまベッドに向かい倒れこむ。

「いてえ……………」

贗者の能力で模倣した能力はリスクもそのまま返ってくる、御影の場合は足への膨大な負担。

御影のようにちよくちよく使って慣れていない俺のひょろい足はすぐさま悲鳴を上げる。

家に帰るまでは平然としていることができたが、さすがに歩いたせいで余計痛みと疲労感が増している。

そのまま寝てしまおうかと考えていたが、悩んでいるうちにいつの間にか寝てしまった。

「ふあゝ……………」

「何締りの無い欠伸してるのよ」

昨日は結局深夜に起きて、寝たせいか、現在御影と共に学園に登校するまで眠れなかった。

やはりあそこは維持でも起きているべきだったと今更ながら悔やむが、今更しようがない。

御影が何かずつと喋っていたが殆ど耳に入らなかった。時折聞いてないことを見破られ幾度が蹴られたが

これもまた睡魔との闘いのせいで殆ど効かなかった、どうせなら眠気が覚めると嬉しいが無理のようだ。

「おいおい幸ちゃん、ものすごい眠そうやなあゝ」

昨日と同じく校門近くで暁に出会う、待ち伏せでもしてるのだろうか？

それとも本当にタイミングがあっているのだろうか？ 疑問だ。

「そんな眠たげな顔でアリスちゃんの前にいくんかゝ？」

「あー……………そーだったな」

そういえば席が隣なのだ、だからといって眠気が覚めるわけではない、どうせこちらを振り向かないのだろうしこの際気にしないでいこう。

「まあ幸ちゃんがいいならいいんやけどね」

そのまま適当に会話をしながら教室に向かう、途中でちらちらこちらを見る視線が気になるが

昨日の御影の騒動のせいだろう、まだ俺のことがばれたわけじゃないはずだ。

もしもそうならもっと視線が痛いはずだ。

教室の中に入り、自分の席に座る、アリスはまだ来ておらず、隣の席は空席のままだ。

そこに鞆を自分の席においた御影が座る。

「アリスさん来たら気まずくないか？」

「遠慮すること無いよあんな女」

何だろう、御影はアリスの事が気に入らないのか？ 普段よりも表情が険しい。

だからといって何かあるわけでも無いだろう、喧嘩を売らなければの話だが。

流石にあのアリスの能力を見たのならそれも無いだろう、圧倒的な防御力の前では御影の高速移動も意味が無いだろう。

もつとも、何か発動条件やリスクがあるのなら変わるだろうが。

「何ばーつとしてんの？ まだ眠い？」

「眠いな、ばーつとしてたのは別の理由だが」

「理由って何？」

「お前が暴れないように願ってただけだ」

「それじゃあまるで私がしょっちゅう暴れてるみたいじゃん」

その通りだろうと呟いた瞬間に拳が鳩尾に突き刺さる。

「クリティカルヒット、幸やんのライフに1のダメージ、幸やんは息絶えた」

「1ダメージって低いな！　つか俺のライフ1?!」

痛みを無視してついつい突っ込んでしまった、背後では暁が楽しそうに笑っている。

そんな中、教室にミィ先生がやってきた。

「はい、席に着いて下さい、ホームルームを始めます」

少し舌足らずな発音で大声で叫ぶ、必死さが伝わったのかすぐさまクラスメート達は席に着く。

御影と暁も素直に席に着き、ホームルームが始まる。

（眠いなあ……）

ふぁーと欠伸をして、何となく右を向いて見る。そこはまだ空席だった。

（まだアリスさんが来てない？）

休みだろうか、何となく体の弱そうなイメージがある。肌が白すぎるせいだろうか？ 先入観過ぎるか。

「あれ？ アリスちゃんはまだ来てないんですか？」

どうやら連絡もいって無いらしい、遅刻か？ 優等生がそんな事をするのだろうか。

それこそが先入観過ぎるのかも知れないが。

「まあアリスちゃんならいいです、サボりって事も無いですし、きっと何かしら事情があるんでしょう」

ミー先生は一人で勝手に納得しホームルームを続ける、ミー先生がいいならそれでいいんだが、未だに来てないことは少し気になる。

昨日に轢かれかけた少女を見ただけに事故にでもあったのかと思っただが、あの能力があるなら寧ろ轢いた車の運転手の方が危ないだろうと思考が行き着き、考えるのを止める。

「すみません、遅れました」

ホームルームが終わりかけた頃にアリスさんは登校してきた。余り急いだ様子もなく平然としている、だがはつきりとクラス全員は遅刻した原因が解った。

寧ろ気づかない方が凄いだろう。

アリスさんの綺麗な髪には寝癖がついている。

本人は気づいていないのだろう、だが周りから見ればすぐにわかるほど一部分だけはねている。

アリスさんは集まる視線を訝しげに思ったのか席に着いた瞬間、隣の席である俺に何かあったのかと聞いてくる。

隣の席であるため話しかけられたこと自体は嬉しい——だが、今回に限っては隣の席だということをかなり後悔した。

（言っただ幸やん、勇気をだすんや！）

暁がこちらをじっと見ている、言いたいことは解る、だが……現実にはそれをなすことはかなり厳しい。

俺が悩んでいる間にもアリスさんはこちらをじっと見てくる。

ああ……美少女に見つめられるなんて男としては至高の一時だろ

う。

覚悟を決めないといけならしい、これ以上無駄に時間を浪費したところで自体が好転することなど有り得ない。

（言ってしまったばそれで終わりだ！）

「え……つと、あの——寝癖着いてますよ？」

その瞬間アリスさんは立ち上がり教室から出て行った。数分後寝癖を直したアリスさんが教室に戻ってきた時、思いつき睨まれたのには言ってしまった自分に後悔がつつた。

「いやあ、ものの見事に言ってしまったな幸やん」

ホームルームが終わり隣からの険悪なオーラに耐えられなくなつた俺は暁の席の隣に座っていた。

一番けしかけてきた本人が馬鹿にしてくるとは、はめられたのか？

「つつか、普通もつと気を使って言うでしょ」

「ならお前が言えば良かったじゃねえか御影……」

いつの間にかいた御影が暁と共に先ほどの話題で精神的ダメージを俺に与えていく。

流石に直球勝負は不味かったか……。いや？ 直球勝負以外に何か方法があつたのだろうか………

「さて……どうしたもんか、アリスさんのあの不機嫌オーラに耐えられる自信が無い」

「私だって居心地悪いわよ、後ろの方からあんな不機嫌オーラ出さ

れたら」

「サボっちまうかい幸ちゃん？」

魅惑的な誘惑だ。だが入学二日目からのサボりは問題児扱いに拍車をかける気がする。

そんな俺の思考は無駄だった、いきなり御影に腕を掴まれて連れて行かれる。

「ナイスアイデアだよ暁、今から全力でサボろう」

「まで？ 何で俺まで？」

「旅は道連れ世は情けって言うじゃない？」

「旅じゃ無いし、情けも何も無いよな？！」

俺の反論は虚しく、御影と暁は俺を引きずって教室からエスケープした。

第五話

「入学二日目からサボりか……」

俺と御影達は学校裏に座っている。すぐに見つかるんじゃないかと思っただ、屋上などには既に先客が居た。

サボリが多い高校だろうとは思っていたが、空き教室なども普通に先客が居たのは流石に驚いた。

これなら後で面倒なことにもならないだろう。

「サボりたさそうにしてたのは幸也なんだから、今更どうでもいいこと言うな」

「そうなんだけどさあ……」

「まあまあ幸やん、どうせあの状況じゃ授業なんて聞いて無いんだからいいやないか」

アリスさんがあの状態では確かに授業など聞いてられない。集中しようとしても不機嫌オーラで完璧に集中が切れてしまう。

「にしても、学校裏も悪くはないね」

「そっか？ まあ悪くは無いかな、良くも無いだろうけど」

「住めば都や幸やん」

「いや、すまねえから……」

「——ちよつと黙って」

他愛も無い話をしていると、急に御影が臨戦状態に入る。それにつられて俺と暁も身構える。

ガサ、ガサと近くの茂みでかすかな音を聞き取った瞬間、御影が

音の方向に瞬時に移動する。

「キヤー！」

甲高い悲鳴、御影かと思い俺も茂みに向かおうとするが、ゆつくりと何者かを捕まえた御影が出てきた。

俺は御影が捕獲した人物を見て驚く。

「はなしてー！」

「何でこんな小さい子が学園に………？」

御影が捕まえてきた人物は、小学生であろう少女、学園は高校生のみなハズだが何処から進入した？

いいや、それよりも何か頭に引っかけてるような……。

「ねえ幸也、この子ってこの間助けた子じゃない？」

「え？」

御影に腕をつかまれながらも必死に逃げようと抵抗している少女はそれを聞いてこちらの方向を見る。

俺も少女の顔をじっと見て見ると、確かに助けた少女だった。

少女は俺がこの間の人物だと理解したのか抵抗を止めて、こちらによってくる。

「お兄さん、また会いましたね」

「俺は何故、学園で会うことになったのか疑問だ、何で学園に居る？」

「というか、こんな小さい子でも簡単に忍び込めるほどの学校は緩いのだろうか？」

まあ、この学校に忍び込もう何て普通の人間は絶対にしないと思うが。

「えっと……、お姉ちゃんに会いに来たの」

「お姉ちゃん？ えーと名前は？」

「羽賀 はが 杏 あんず ですね」

「——え？」

急に今までに無い声を聞いて後ろを振り返る、そこには授業中であるはずのアリスさんが立っていた。
不機嫌オーラはそのま——先ほどよりも増している。明らかに怒っている。

「何でアリスさんが此処に？ とうか何でこの子のお姉さんの名前を即答？」

「あー！ アリスだあ！」

少女はアリスを見つけると駆け寄っていく、どうやら知り合いのようだが、お姉さんとも知り合いだろうか？

羽賀 杏 と言って言う名前は何処かで聞いた気もするからもしかしたらクラスメイトか何かか？

「まさか杏さんに会いに来たんですか凜？」

「うん」

「そうですね、では丁度いい事に幸也さんたち三人も居ることですし少し、杏さんの所に行きましょうか」

「えーと……アリスさんと凜ちゃんとそのお姉さんが知り合いっぽいのはわかったんだけど何で此処にアリスさんが？」

「ああ、説明してませんでしたね」

「それと、杏会長の元に俺らもついていく理由も一緒に教えてくれ

へんか？」

杏会長……？——会長！？アレ？どつかで聞いたことがあると思つたら生徒会長殿でしたか？

俺はゆつくりと御影の方を向く、御影も俺のほうを向いていて、目が合つた瞬間にあらぬ方向に視線を飛ばした。

（よし……コイツも知らなかったな）

少なくとも仲間が居て助かった。

「そうですね……両方一度に説明しましょうか」

「お願いします」

「まずは私が此処に来た理由から説明します、まあ至極簡単な事なのですが……」

それから少しアリスさんが理由を話しおよその理由が解つた、どうやらサボつた俺達を

授業を受けても受けなくともさほど代わりがないアリスさんが探しに行けと先生から指令を出されたらしい。

不機嫌な状態のアリスさんを更に面倒な事をさせてしまつて更に不機嫌にしていまい、かなりの恐怖を今俺は感じている。

「もう一つ、杏さんとあわせる理由は本人が説明してくれると思うので、そこで本人から聞いてください」

「えー、此処で教えてくれればいいじゃん」

「どうせ授業に出ないなら時間を効率よく使ってください、此処で説明するよりも直接あつて話して

結論を出してもらつたほうが圧倒的に効率的です」

「とういうか、杏会長は今授業中なのは？」

「それなら問題ありません、どうせ生徒会室で惰眠を貪っているはずですから」

生徒会長なのにサボって寝ているのか……、いやアリスさんのように授業を受けても受けなくても変わらないという考えでさほど問題視されていなくて、自由にできるのか？

「それでは行きましょう」

俺達と凜ちゃんはアリスさんに連れられて生徒会室に向かった。生徒会室』と書いてある教室まではさほど時間が掛からなかった。

「なあ幸やん、俺は生徒会室の様なところにきていい思いをした事が無いんよ」

「俺もだ暁、いい思い出なんてあるはずが無い」

「私もだよ………逃げていい？」

そんなの無理だ、アリスさんが明らかに不機嫌である以上、これ以上不機嫌にしてみようと

どうなるか解らない、もしかしたら何も起きないかもしれないが、付き合いが浅い以上どうなるか検討がつかない。

「失礼します」

ノックもなしにいきなり生徒会室に入るアリスさん、それに続いて覚悟を決めた俺達が入る、遅れて凜ちゃんも。

「……………」

——生徒会室はただのごみ置き場だったらいい、そう思わせるほどお菓子や雑誌などが一面に散らばっている。

普通に考えて生徒会室ではない、だって明らかに個人部屋みたいな感じだし、ベッドまであるし…………。

そのベッドで人が寝ているが、寝ている人物が話による杏会長なのだろう。

「杏さん、起きてください、妹と例の三人組が来てます」

「…………後5分寝かせてアリス、そうしたらたぶん私の分身が出てきて世界平和を成してくれるわ……………」

（…………本当に生徒会長だろうか？）

必死にアリスさんが起こそうとしているが杏会長は全く起きる様子を見せない。

とうとう諦めたのがアリスさんがこちらに向かってきた。

「杏さんがお起きにならないので少し待っていてください、そこら辺で適当に寛いでいてください」

「うい…………」

普段だったらえゝとか御影が言うところだろうが、会長が起きないことによって余計ストレスがたまったのか

よりアリスさんが不機嫌になっている…………。死亡フラグでも立ってしまうのだろうか？

第六話

「失礼したわあ、ちと寝不足でねえ」

「それならいつも寝不足になってしまえます杏さん、寝癖ついてますよ」

「ありや、それじゃあ今後気をつけるわ」

本当に5分で杏会長は起きた、決して分身ではないが。……と
うより制服が乱れてます杏会長、主に暁が凝視してます。

それに寝癖ついていたのはアリスさんも同じだ、決してそんなことは口に出しはしない、死ぬ可能性が上昇する。

つか杏会長は生徒会長というだけ硬い人間かと思っていたが、どうやらかなり柔らかそうだ、心身ともに……。

「それで、俺達は何のために呼ばれたんですか？」

「何？ アリス話してないん？」

「直々に話してください、面倒なので」

話はどうやら長くなるらしい、自分で話すのが面倒な程とは聞く
こちらでも面倒になる可能性がある。

現にもう既に御影が飽きてきたのかきよろきよろと周りを見回している、暁もおもいつきり欠伸をしている。凝視すら飽きたか。

生徒会長の前なのだからもう少し落ち着いて問題児ではないところをアピールしてほしい……。

「別に面倒なほどじゃないと思うんやけどねえ」

「とりあえず、話してもらえませんか？」

「簡単やよ、私の元でちよつと雑務こなして欲しいんよ」

「雑務？」

「杏さん……いくらなんでも端折りすぎです」

雑務？　つかそれは生徒会員がやるべきじゃないか？

「しゃーない詳しく説明すると、能力者が引き起こす事件は少なく無いってのはしつとるよね？」

「ええ、まあ」

「それを同じ能力者である私達に捕まえたり成敗したりして欲しいって依頼が国からきとるわけよ」

「私達に警官まがいの事をしろって事ですかア？」

御影が察したととりだと俺も思うが、何故俺達なのだろうか？
荒事に慣れてると思われたか？

もしもそうなら、直ちに俺以外が荒事になれているのですと訂正しなければいけない。

「まあそういうこつた、もち報奨金とかもでるから安心しいや」
「報奨金？」

御影の目の色が変わった、金が絡むとすぐこつた……、この調子だと軽く引き受けてしまいそうだが、
わざわざ荒事に巻き込まれるなんて失態俺が許すはずが無い。

「失礼ですが、おことわ」

「——もちろんやりますとも会長、そのたわわな胸に誓い、必ずやこの地区の治安を守って見せます」

おい……、俺の言葉にすぐさま被せてきたのは暁だ、似非関西語が完璧に失われているぞ。
そしていつまで会長の豊満な胸を凝視している気だ？

「いえ、コイツの言ったの事は冗談です、お断りいたします」

「ありがとなあ、引き受けてくれてえ、人手足りなくて困ってたんよあ」

「あの？ 人の話聞いてますか？」

「ありがとうございます紅花さん、引く受けて下さって」

「いや、だか」

「——引き受けてくださってありがとうございます」

強引ですねアリスさん……、もうそんな殺気の籠った目で見ないでください、そろそろ限界です……。

御影は金が絡んだ時点でやる気だ、暁も完璧にやる気だ、アリスさんは俺を殺る気だ。

ああ……逃げ場なしなあ……。

「解りました……、力になれるかわからないですけどやります」

「ありがとねえ」

「でも何で俺達なんですか？」

そこが謎だ、治安を維持するというより治安を壊す方が得意な御影と暁だ、スカウトするより注意する方があつてる。

もちろん俺は治安を壊すなんて事絶対にしないと、信じている。

「簡単やよ、強いやん、御影ちゃんも暁君も幸也君もそのことに関して解ってるでしょ？」

「まあ……はい」

御影も暁も俺も今までに荒事に巻き込まれてきたせいでそれなりに腕っ節には自信がある。

というか、腕っ節に自信が無いとダメみたいな感じだが、やはり能

力者同士の戦闘が主なのだろうか……？

「捕まえる際に戦闘になることなんて日常茶飯事やから、なるべく強く無いといけへんのよ」

「用は、強くて良く働いてくれる人材が欲しいんです」

「良く働くは別として強さは自信あるからねえ、なあ幸やん」

「早々、ちゃんと幸也君の能力も把握してるから、強く無いなんて言い訳聞けへんからね」

そうですかと呟き、俺は諦める、なに、軽いバイトだと思えばいい、戦うのは御影と暁に任せれば問題は無い。

能力はやはりばれているのか、入試時に能力試された時には適当に他の人の能力を使っただが、バレていたか。

「ちなみに、後一人、一年生と一緒に働いてくれる人が居ますが後で紹介しますね、ちなみに私も働きます」

「アリスともう一人の子は入学前からこの仕事やる事が決まっていたから、説明はいらんね

ああ、それと仕事中はこれつけてな」

杏会長から手渡されたのは校章の入った腕章、更に生徒会員と書いてある。

「あの」

「——単純に言えば生徒会にご入会ありがとうございます、お仕事は生徒委員にしか回せんのや」

「入会おめでとうございます」

詐欺だ、間違いなく詐欺だ。

「ねえねえかつこよくない？」

早速御影がつけて騒いでいる、時折羨ましくなるよその単純な思考回路が。

暁もつけてなんかポーズとってるし……、ああもう決定事項なんだな。

「やるからにはしっかりやりますが、無茶はしませんから」

「なに、強い敵さんと出会ったら無茶してでも捕まえて来る？　いい心がけやなあ」

ダメだ、この人は全く人の話を聞いていない。

迂闊だったか……もっと抵抗するべきだった……。

いや、決まったことを後悔している場合じゃない、此処から現状を良くしていかなければ。

（まあ、御影とかも乗り気だし多少はがんばるか）

ちなみに残りの授業も面倒だったの一日中今日は生徒会室でだらしていることにした俺達。

別に生徒会室が気に入ったわけじゃないんだ、きっと……。

第七話（前書き）

感想等に剣の口調にご指摘があつたので
設定を変更しました、無くなつた訳ではなく後々の設定に使用
するので
ご了承ください。

第七話

「そういえば、もう一人居るらしいですけど誰なんですか？」

放課後も近づいてきた頃、俺はふと思い出して聞いてみた、もう一人居ると言っていたが、こちらは何も知らない。

御影と暁は興味がなさそうだが、俺にとっては大問題だ、もしかしたら常識をわきまえている人間かもしれない。

腕っ節に自信がある人間なんてだいたい御影みたいな人が多いが、一縷の希にかけるのも悪くは無いはずだ。

「あゝ誰やったっけアリス？」

「よくあれだけ印象に残る人物を忘れられますね」

「印象に残る人物ですか……」

それってつまり変人って事だよな？ いいや……物凄い好青年とか美少女とかで印象に残っているかもしれない。

それに変人と言っても普段は大人しくて良識有る人物だって居るはずだ。

「あゝ、侍に憧れてるあの子ね」

ダメだ、侍に憧れているって時点でアウトだ。もしかしたらいきなり真剣勝負を挑まれるかもしれない。

もしもそうでも俺なら何とか断れる、だが、もしも御影とかにそんな願いが出されたら……考えるのも嫌になる。

「名前はなんだったけ？」

「結局殆ど思い出せてませんね、確か冬木ふゆき 剣つるぎだっと思います」

「剣？ 何処かで聞いたような……」

「あゝ剣ちゃんね、まさか知らんの幸ちゃん」

「ちゃん？ 男じゃないのか？」

「何言うとるん、同じクラスメイトやないか、それに飛びっきりの美女やで、ナイスバディな」

俺は記憶を掘り返す、確かにそんな名前の人が居た気がする、御影達が周りに居ると誰も寄ってこないの

余りクラスメイトの顔が思い出せないが、居たと思う、にしても美女か…… ナイスバディな……。

「まあ放課後になったら来るんやし、そんな時わかるやん」

思い出すにしろ思い出さないにしろ、最も気に掛かっているのが——侍に憧れているところだ。

大丈夫だ、流石に物凄い印象に残るような変人ならいくら関係が少なくて俺だって覚えているはずだ。

「お、もうすぐ放課後やね、此処に居ると時間が狂ってしまうわ」
「会長は惰眠を貪っているだけだから狂うんですよ」

時間がたってアリスさんの機嫌が直ったかと思っていたが、言葉の節々に感じられる棘からみて、まだ治っていないようだ。

ちなみに御影も先ほどから寝ている、惰眠を貪ってるのは実質二人だ。

——いいや、ずっと前から静かだと思っていたが杏会長の妹の凜ちゃんも眠っている。

暁がこれから来るであろう人物に嫌がらせのつもりか、ドアの鍵を閉めた。

どうせ美女の困った声が聞きたいとかそこら辺の下心が働いたのだろう。止める気など無いが……。

トン、トン、ドアがノックされる音が聞こえる、とうとう剣さんの御出座しだろうか。

少しすると——ドアが音を立てて【切り刻まれた】。

「はい？」

「お邪魔するでござる」

ござる口調で、ドアを切り刻んだ美女が入ってくる、黒く長い髪をポニーテールにしたボンツキユツボンな美女だ。
極まれに居そうな美女だ——手にもたれた日本刀さえなければ。

「人が来るとわかっているのに鍵を閉めるなど酷いでござるよ」

アレだ、ござるよって口調は最大限許容範囲だ、別に口調など気にしなければ問題ない。

でも、明らかに手に持つ日本刀は銃刀法違反だよな？ 侍に憧れるとかじゃすまないよな？

というか、杏会長はこんな人物を忘れていたのか？ 未だに起きない凜ちゃんはこういう感覚をしているんだ？

「あの……？ その手に持っているものは何ですか？」

「あくせさりい」

「それはアクセサリーじゃなくて明らかに、にほんと」

「——あくせさりい」

そうか、この人も人の話を聞くことができないらしい、どうやらこの生徒会にまともに人の話を聞ける人物は皆無とみた。

御影と暁は早速興味を示している、御影は主に日本刀に、暁は主に制服の中に隠された巨大な胸に。

「さて、拙者を呼び出したって事は仕事ですか？」

「察しが良くてたすかるわあ、早々、前に言ってた相方達の話しやけどこの子らと組んでくれな」

「この先ほどから人を凝視してくる奴らですか？」

いえ、決して俺は凝視なんてしてないぞ、決して暁と同じ所を凝視なんてしてない、神に誓ったっていい。

……天罰が降るかもしれない。

「何？ 何か問題が有るの？」

御影が早速突っかかる、もしかして挑発して戦おうって魂胆じゃないよな？

いや、コイツにそんな器用な真似ができるはずが無いから、単純にム力ついただけか？

「いや、問題はない、二つ名付きにその仲間となれば十分な実力を持っているのだろう？」

先ほどの行動と口調はおかしかったが比較的温和そうだ、これなら何も問題を起しそうではない。

「それじゃ、一年生メンバーが揃ったことやし、お仕事お願いしますかね」

「そういや、詳しく聞いてませんでしたね」

「最初に簡単に説明した通りや、適当にパトロールして悪さしとる能力者捕まえてきてくれればええ」

「何もなかったらさっさと帰っていいんですね？」
「ま、そやな」

なら、何もごともない事を願おう。そうすれば平和に過ごせる。

「五人居るなら微妙やけど2：3で分かれてパトロール頼むわ、そのほうが索敵範囲ひろなるし」

「わかりました、では分かれましょう」

此処で普通は俺と御影と暁で三人とアリスさんと剣さんで分かれるのが一般的だろう、だが俺は決してそうしない。

何故ならパトロールなどと言う明らかに荒事に首を突っ込まなければいけない状況に陥るかもしれない状況で、

御影と暁と共に居るなど、自ら墓穴を掘っているようなものだ。

「暁と御影はいいコンビだからその二人で行こう、俺はアリスさんたちと行く」

「なに抜け駆けしようとしてるんや幸やん、俺も美女と一緒にパトロールがしたいわ」

「美女なら此処に居るじゃない？」

「邪な目で見ないでください」

アリスさんの拒絶により見事に暁は御影とペアになった——これで危険は去った。

「一緒に行かないで後悔してもしらないんだからね幸也！」

「大丈夫だ、お前らも無茶するなよ御影」

無茶するなと言っても無茶するのだろうか——一応言っておく、御影は何故か思いつきり不機嫌そうな顔をして

暁を引つ張りながら出て行った。

「それじゃいきましよう」

俺はアリスさんと剣さんと共に生徒会室を後にした。

第七話（後書き）

もし良かったら感想をお書きください。
アドバイス等待ってます。

第八話

「特に何もおきそうにありませんね」

「そうだな、少しつまらん」

俺達は適当に町を歩き回っている、人通りの多いところから少ないところまで。

腕章をつけている為、周りから注目されることが多い。そして俺は今とても苦しい。

別に注目されることが苦になっていくわけではない——なら何故か？

それは隣を歩く少女二人のせいだ。アリスさんは朝からずっと不機嫌だし、剣さんは話しかけづらい。

沈黙の中でただ黙々と歩くことがこんなにもつらいとは思わなかった。

それに先ほどの剣さんのつまらない発言からして、この人もどうやら温和そうではなく好戦的なようだ。

ちなみに剣さんの日本刀は布に包んであって中身が見えないようになっている。

（どうせなら御影達といったほうが正解だった……）

好戦的な人物が居てなお、居心地が悪いのなら居心地がいいほうに居た方が正解だ。

「此処も以上なさそうですね、次何処に行きますか？」

一通り歩き回ったが特に異常はない、だからと言って俺から切り

上げましょうはいづらい。

「いえ、今日はこちら辺にしておきましょう」

願ってもない要望がアリスさんの口から出た。俺はそれに同意し剣さんも素直に同意してくれた。

三人とも帰路につく。俺と剣さんはどうやら一緒の方向らしいが、アリスさんは速攻で車を呼んだため解らなかった。

腕章を取ってパトロール中も持っていた鞆にしまい帰路につく。

……………気まずい。

帰る方向が同じな為自然と一緒に帰る的な事になってはいるのだが、何も話することがない。

だからといって喋りかけて見ようとする勇氣は俺にはなく、ただ事態がこれ以上悪化しないことを願うしかできない。

「そつえば聞きたいことがあったんだがよろしいか？」

内心驚いたが剣さんの方から話しかけてきてくれた。

「何ですか？」

「いや、幸也殿の友達の御影殿の能力は入学式で把握しているのだが、幸也殿の能力がわかっていなくてな

これから共に行動する機会が多いのだから少し知っておきたいのだがいいか？」

いいか？ と聞かれてもいきなり最も話題にされたくないワードだ。

普段だったら適当な能力を言っってはぐらかしただろう。

——でも

「贗者です」
フェイカー

何故か俺は素直に言ってしまった、剣さんが質問をしている時の微笑みにやられたわけではない。

ただ何となく、嘘がつけなかった。多分それは気まぐれで馬鹿な事だろう、でも何故か素直に俺は言っていた。

「贗者？ それは確か他人の能力を真似する正体不明の奴だな？」

「そういうことになってますね」

「本当か？ いや……嘘ではなさそうだな、それより正体不明で通っているのに拙者に教えていいのか？」

もしダメなら忘れるよう努力するが」

そういつて近くの電柱に頭をぶつけようとする剣さんに思わず笑ってしまった、すぐさま睨まれて笑うのを止めたが、笑いがこみ上げてきて止まらない。

多分、何となくだけど、剣さんのそういう普通の人とは違った感覚を感じて、素直に言ってしまったんだろう。御影ではないが本能的だと思う。

「大丈夫ですよ、剣さんが言いふらさなければですけど」

「そうか、それなら大丈夫だ、口は堅いほうだと自負している」

「それは安心しますね」

自信ありげに言う剣さんに本心から安心する、もしもこれで口が軽いなどと言われたら、自分がとった行動を一生後悔してしまう。剣さんは少し恥ずかしそうに俯きながら何かをいいたさそうにしている。

「どうかしましたか剣さん？」

「いや……あつて間もないのに言うのも失礼かもしれないが、さん付けや敬語は止めてもらえないか？」

「え？」

「これから行動を共にする仲間によそよしく去れるのは嫌なのだ、無論拙者も敬語等は止める」

仲間——恥ずかしそうな表情で言っている剣さんに心が高ぶる、高ぶる心を沈めながら俺は普段を意識して喋る。

「OK、それじゃこれからは剣と呼ばせてもらう」

「急に頼みごとをして悪かったな、性分だな」

「気にしないでくれ、俺も敬語は得意じゃない」

普段、騒いばかりで御影達とぐらいしか接していない友達のこと……悲しいながら少ない俺にとって

いきなり仲間なんて優しい言葉を言ってくれる人物から頼まれたら断れないだろう。

情に脆い性格ではないと思っていたが、案外違ったのかもしれない。

「それじゃあな、俺はこっちだから」

「ああ、さようならだ」

途中の分かれ道で俺と剣は別れる、最初の頃の印象とは全く違う剣に内心驚いてはいるが、その驚きが良い方なので寧ろ心地よい。

（意外と楽しかったか）

そう思えると意外と生徒会に入ったことは良かったのかもしれない。

平和で温和な生活を普段は望んでいるくせに刺激が来るとすぐにこれだ——俺は少し優柔不断なのだろうか？

俺は人通りの少ない帰り道とゆつくりと歩いていく。

人は進行方向から歩いてくる人物が一人のみ、携帯で話している帽子を被った青年のみだ。

「……………だ、……………そ、せ……………を、能力者……………にするのだ」

断片的に聞こえてくる声、別に盗み聞きがしたいわけではない、ただ何となく意識がそちらに向いている。
青年とすれ違うギリギリのところ。

「我らが主、暴君の申すがままに」

はつきりと聞こえたのはそこまでだ、別になんてことはない、たぶんどっかの怪しい宗教団体の人間だ。
何か目が危なかった気がする。

俺は面倒な考えを停止して家に帰った。

第九話（前書き）

投稿直後に間違いを発見した為修正。

第九話

「よお幸やん、昨日はどうやった？」

いつも通り御影と共に学園に来た俺にやはり校門近くで暁が現れる。

どうと言われても特に報告することが思い当たらなかったのもなかったと曖昧に言う。

剣と仲良くなった、もあつたが別に報告することでもないだろう。言ったら言ったでうるさそうだ。

「こつちも昨日は何もなかったよ」

「何か起こりそうなゲーセンをずっと見張ってたんやけどなあ」

「遊び歩いてたわけか」

「息抜き程度よ」

「俺の懐が寂しくなるほどや……」

奢らされたのか……、ご愁傷様——全くかわいそうなどとは思わないが。

そのまま話しながら俺達は教室に向かう。

何となくだが昨日よりも周りの視線がこちらに注目している。

もう既に生徒会に入ったことが噂されているのだろう。

「おはよう幸也」

「ああ、おはよう剣」

挨拶をしてきたのは剣だ、暁と御影が驚いているが、そこまで驚くことだろうか？

剣は昨日、話をしてみても凜としているが話しやすい人だし……

…何で物凄い殺気の籠った目で俺を睨んでくる御影？

「……………どうやって仲良くなったんや幸やん？」

「どうって言われても、別に何もしてないが」

「いやいや……剣ちゃんはクラスでも俺ら並に浮いている存在やよ？ 凜としていて常に布に包んだるけど日本刀持ち有るとるしなあ」
「確かに凜としているが話しやすいぞ」

まあ日本刀を持ち歩いていることに関してはなにもいえないが、性格は良い方だと思う。

凜していると近寄りがたいを間違えているのだろうかクラスメイト達は？

「そう硬くなるな、幸也の連れの方々、同じクラスメイトであろう？」

「ま、そうねよろしく」

御影が表情を少し和らげて言う。暁もよろしくと言葉を交わし、教室に入る。

俺は自分の席に着く、隣の席のアリスさんはまだ来ていない、またも寝坊だろうか？

杏会長見たいに寝ぼけるのだろうか？

そんなどうでもいい考えをしている間にホームルームが始まり、昨日と同じようにアリスが遅れてきた。

昨日と違う点は寝癖が無い——いいや、遠目には見えないが近づいてくるとわかるがかすかに髪の毛が跳ねている。

気にしなければどうということは無寝癖だが、どうしてもアリスさんが寝癖をつけているとやはり笑える。

本人の前でそんなことを言ったらまたも昨日と同じく一日中不機嫌になってしまうので絶対に言うことは無いだろう。

「何微笑んでいるんですか？」

「え？」

突然ミー先生に声をかけられて間抜けな声を上げてしまっ、微笑んでいたと言っよりにはやけていたかもしれない……。年下の少女に氣を使われたと思うと何となくショックを受ける。

「ちゃんと聞いていてくださいね、それとアリスちゃん、寝癖が直しかれていませんよ？」

ピキ……。空氣に亀裂が走る、ミー先生、俺に氣を使わないでアリスさんに氣を使つてくれ……。もしかしてこの間小さい言われたのを根に持つていたのか？

結局その日は放課後生徒会室に向かうまでずっと不機嫌だった――いいや生徒会室に着いても不機嫌だ。昨日からアリスさんの不機嫌な顔しか見ていないなあ……。

「それじゃ今日もパトロール頼んだわ」

会長のダルそんな号令を合図に昨日と同じメンバーで街に向かう。ちなみに暁が昨日で財布の中身が寂しくなつた為、報奨金はいつもらえるか聞いていたが、どうやら月末らしい、もうしばらくあるなあと暁ががっくりとする、御影も思いつきり肩を落としている。

「今日はどこら辺を回る？」

「お任せします」

「任せる」

任せられても別に行くあてなんて無い、結局今日も適当にぶらつくだけか、曉達のようにゲーセンに入り浸るのも無理が有る。

なるべく人気が無いところがいい、そのほうが事件が起こる確率も高いし、人目のつく場所だと能力を余り使いたくは無い。

——別に邪な心が有るわけではない、断じて。

結局俺達は路地裏を歩いている。

「今日も特に何もありません」

「そうだな、だが油断は禁物だ、世の中何が起こるかわからない」

「そうです、油断しないでください」

そういわれても、今までに何も起きていない、油断も何も緊迫した状況にすら一度もなっていない。

平凡は良い事だ、緊張するのは疲れる。それに事件なんて早々起きはしない。

「誰か倒れていませんか?!」

だが——そう思った俺の思考を現実は容易く奪い去った。

アリスさんが叫んだ直後、剣と俺も路地の曲がり角に人の足を視認する。

即座に俺は走り出し、足の出ている方を見た。

「……………ッ」

——倒れている人の腹部が赤く染まっている、すぐさまそれが出血によるものだと判断した俺はすぐさま駆け寄る。

アリスさんと剣もすぐさま駆け寄ってくる、そちらを振り向いた瞬間——悪寒が走る。

（アリスさんの後ろに風が迫っている？）

それは直感的なものだった、ただ何となく確信に近いものを感じ、考えるよりも先に体が動く。

（イミテーション）
（模倣旋風）

瞬間的にアリスさんを横に弾き飛ばし腕を顔の前で交差させ眼前を塞ぐ。

——皮膚が切り裂かれる感覚と共に激痛が走る。

「幸也さん?!」

研ぎ澄まされた風が俺を切り裂き、なお旋回してこちらに向かってくる。

俺は痛みも忘れてアリスさんを抱えて走り出す。

「こつちだ剣！」

既に後を居ってくる剣に声をかけ、走る。

狭い路地の中では圧倒的に視認しにくい風の刃を避け続けるのは難しい、かといって人気の多い場所は関係のない人を巻き込む可能性がある。

（どうする？）

そう考えた瞬間、風の刃が俺を捕らえる。

（やばッ!）

——眼前に迫った風の刃は不可視の壁により遮られた。

「そ……そうだったな、アリスさんが便利な能力を持ってたじゃねえか……」

一人を抱えて全力疾走したために息が切れる、荒い呼吸を沈めながら剣がこちらに向かって走ってくるのを見る。
風の刃はもう襲ってこないようだ、第二派はこず、剣が無事にこちらまで来た。俺は腕に抱えたアリスさんを下ろす。

「アリスさん、剣怪我は？」

「貴方が言いますか?!」

アリスさんが声を荒げている。

俺は目が点になる、怒っているのか？抱えた時に何処か気の障る部分に触れてしまったのだろうか……？

「私は無事です、貴方のおかげで」

「大丈夫か幸也？」

ああ、そうか、怪我をしたのは俺だった、心配をかけさせてしまったか？

「すぐに病院に」

「——別にそこまでじゃない、寧ろさっき倒れていた人を助けに行かないと」

少しだけしか見ていないがかなりの出血量だったはずだ。

(流石にきついかもしれないが)

他人の能力を模倣できるのは一日約一回、使おうと思えば二回ほど使えるだろうが

肉体的に無謀な為、一日一度の制約自然と付いている。

能力発動からの効果持続時間は約10分程度だ、先ほどからまだ余り時間はたっていない、

十分に使えるが、体への負担が使用時間が増すことに圧倒的に増える。

——だが、今はそれを気にしている場合ではない。

「アリスは病院に連絡を、俺は先ほどの場所に向かう、剣は少し風を操っていた人間が付近にいないか調べてくれ」

「怪我をしているのだから動かない方が」

俺は制止の声を無視して旋風を発動して走り出す。

すぐさま、倒れていた人の下にたどり着き生死の確認を急ぐ。

「…………ちくしょう」

既に死んでいる……、まだ体は生暖かさを持っている。

（もしも俺がもっと早く此处に来ていたら…………？）

——俺はすぐさま思考を切り替える。

（そんな馬鹿なことを考えても無駄だ）

俺は恐怖で歪んだ顔をした死人の臉をゆっくりと閉ざす。
手を合わせせめてもの思いで祈る。

第十話

「大丈夫ですか？ 私のせいですみません……」

アリスさんが心配そうに声をかけて来る。

此処は病院だ、救急車を呼んだところ、俺まで一緒に運ばれてしまった。

腕の切り傷は大量に有るが一つ一つは軽い。どれも深くは切れていない。

「大丈夫です、それよりも足のほうが酷いくらいです」

「——それも私のせいですね」

アリスさんが俯く、すぐさまそうじゃないと否定したが聞いている様子が無い。

庇ったのは確かだ、でも俺が勝手に行動しただけでそれについて責任を負って貰おうなんて考えていない。

その意思を伝えては見たが、余り聞いている様子ではない。

「本当に気にしないでください、それに最後はアリスさんが助けてくれたんだし、それでお相子にしよう」

「ですが」

「——お相子だ」

「……………」

強制的に納得させた。我ながら強引な手段に出たとは思うが、しようがない。

アリスさんはまだ何か言いたさそうだったが、結局は何も言わずに納得してくれたようだ。

「すまない、待たせた」

病院の入り口から剣がスタスタと歩いてくる、どうやら杏会長と連絡を取ってきたらしい。

何だか剣まで少し落ち込んでいる。

「怪我は大丈夫か？」

「全く問題なし、まあ少し足きついから動けないけどな」

「すま」

「――謝るの無しな」

誰かに謝って欲しいつもりで怪我を負ったわけじゃないのにそう何度も謝られるのはごめんだ。

そもそも女の子に謝罪させるなど俺には気が引けて無理だ。

「そうだ、御影達への連絡はしてないよな？」

「ああ、だが本当に良いのか？」

俺は剣が連絡をしに行くにともない、御影達への連絡を止めさせた。

無駄な心配をかけさせたくないのもあるが

「犯人を捕まえる所か姿すら見てないなんて報告したら馬鹿にされるのがオチだ」

「そうだろうか……？ 普通に心配してくれると思うのだが」

「心配して仇を私が討つてやる！ 何てことになるかと面倒なんだよ」

もしそんな風は無駄にやる気を出させると関係のない人を大量に巻き込んでまで無理やり犯人をボコるために行動するだろう。

そして結局誰が謝ったり後始末をするかというと——俺なんだ。だいたい利己的な理由だが、言うよりも言わない方が得策だ。

「そうか——どうやら迎えが来たみたいだな」

明らかな高級車が病院の前に止まる、そこから出てきたのは杏会长だ。

ゆっくりとこちらに向かってくる。

「お、元気そうやね」

「ええ、まあ」

「心配したんよ」

へらへらと締りの無い顔で言われても全く信憑性がない。

本人も解ってていつてるようにも感じる。

「さてと、長居しても無駄やし帰るか、送ってくわ」

「ありがとうございます」

普通だったなら断るが、流石に今の足の状態では無理だ、御影の能力は足に膨大な負担が掛かる。

模倣しているだけの俺にはそれに耐えるほどの体も慣れも無い。

「そんじゃ、剣ちゃんたちも乗つけてくからさっさと乗り込んでくれ」

「お言葉に甘えます」

「感謝する」

俺達は車に乗り込み家まで杏会长に家まで送ってもらった。結局その日は家に帰り明日に備えて体力の回復に努めた。

「おはよ」

「おう」

御影といつも通り登校する、ブレザーを着ているため腕に巻かれている包帯は何も見えない。
何か勘付かれるようなことをしなければバレないだろう。

「よお 幸ちゃん」

やはりいつも通り校門の近くで暁に会う、そろそろ疑っても良いだろうか？

暁が何となくじーと腕を見てくるが、すぐに視線をそらした。

「さて、さっさと教室に向かうか」

「そやな」

少しばかり危険を感じ、すぐさま俺は歩き出す。

（勘だけは異常な奴らだからな）

バレる可能性は低くない。だからといって馬鹿にされるネタをみすみすばらす様なことはしない。

会長達三人には念を押したし、大丈夫だろう。

「おはよう 幸也」

玄関先で出会ったのは剣だ、目の下に隈が有るが寝不足だろうか？

剣と合流して教室に向かうが眠そうなそぶりは余り無い。

教室に着き、またもアリスさんがいない事を確認し、いつも通りホームルームが始まる。

「遅れました」

そして遅れてくるアリスさんもいつも通りだ——アリスさんまで目の下に隈が有る。

寝不足だろうか……？ いや、ほんの少し寝癖が有る——不思議だ。アリスさんの不思議について真面目に考えている間にホームルームは颯爽と終わった。

第十一話

「昨日のことで話が有るそうなので生徒会室に来てください」

「今から？」

「今からです」

ホームルームが終わってすぐのことだ、アリスさんが俺の元に集まる御影達に話しかけてきたのは。

昨日のこと？ と御影と暁は何かわからない様子だが、教えてないので当然だ。

行けば解ると納得させて、俺は剣も呼んで生徒会室に向かった。

「むう……授業を受けなくて良いのか？」

「生徒会の仕事だと既に先生に連絡が回っているはずですよ」

「わーい、公認のサボりだなんて理想的だね！」

剣は余り良く思っ居ないようだが、俺達からすれば面倒な授業を抜け出せてラッキーだ。

俺の場合は成績が心配で少ばかり後悔をしているが。

にしても、昨日の事を説明するに当たってどうやって説明するかが問題だ。

俺の失態を思いっきり知られる可能性は低いだろう、言わないでくれと念を押しておいたのだ、流石に忘れてはいないはずだ。

「連れて来ました」

生徒会室に到着して中に入る。

「おゝご苦労さん」

杏会長はベッドで横になっている、かなり眠そうだ。それに疲れているような感じもする。ダルそうなのは昨日の印象からしていつものことなのだろう。

「それで昨日なにがあったん？」

「早々、何も聞いてないんだけど？」

御影と暁が早速その話題を切り出す。杏会長もそれがわかっていたのかゆっくりと体を起してこちらを向く。俺達は適当に座り、話を聞く体制を作った。

「昨日な、能力者による殺人があったんよ」

「へえ」

殺人と言われても御影は興味が薄そうだが、別に能力者による殺人は悲しいが珍しいことではない。

「それだけ？」

「いんや、そこで幸也君達が偶然その場に向かっててな、その殺人犯に襲われたんよ」

「捕まえたの？」

「それが思いつきり逃げられちゃってねえ」

——役立たず、すぐさま罵倒の声が俺にかかる。

そんなこと言われてもと弁解しようとしたが、逃げられた上に殆ど何の情報も得ていないのだ。

得た情報も曖昧だ、俺が襲われた風を操る能力であることしかわかっていない。まさに弁解の余地が無い。

「まあ、幸也君が怪我してしまったし、犯人に逃げられてるから一応報告しておこうとおもってな」

「……怪我？」

御影がこちらを向いた――瞬間、俺の腕を思いっきり握ってきた。俺は傷口を圧迫されて、痛みに顔を歪める。

「何で隠してるの？」

「……………」

俺は答えない、罵倒されるのが嫌だったなんて言えないし、心配させるのが嫌だったなんて恥ずかしくて言えない。

御影はジーっと俺を睨んでくる、暁は何も言ってこない。

「ああそう、何も言わないんだ？」

「言うことが無い」

「幸也のバカ！！」

その一言が失敗だった。御影は握っていた腕に更に力を込めてから離し、速攻で生徒会室から出て行った。

取り残された俺は啞然としている、暁はあくあやつちまったと俺を哀れみの目で見ている。

杏会長は何かに気づいたのかしきりに頷き、剣とアリスさんはただ呆然としている。

「追いかけてんの？」

杏会長の言葉が俺を現実に戻す。追いかけないのかと聞かれても、

何処に言ったのかすら検討がつかない。

出て行くときの速度から見て能力を使っている。もう既に学園外にいる可能性も高い。

「後で謝っておきますよ……それに報告だけじゃないんでしょう呼んだ理由は？」

報告するだけだったら放課後でも構わない、でも何かしら問題が有るのなら

今呼ばれた理由が解る。

「鋭いねえ、その鋭さがもつとほかの事に回れば良いのに」

「何を言っているんですか？」

さあ？ と否会長ははぐらかし話に移る。

「あくまで推測の域をでないんやけど、犯人は複数名いるっぽいんですよ」

「複数名ですか？」

「そや、幸也君が受けた風の傷と被害者が受けた傷じゃ全く違うんですよ、どちらも切り裂かれてるけど」

幸也君は重傷を負ってないのに、被害者は腹部を深く切られてるんですよ」

「確かに、威力的にはおかしいですね」

殆ど直撃したのにもかかわらず浅い切り傷を残しただけだった。もしかしたら全力ではないのかもしれないが、経験上、風を操ったりする能力は全体的に攻撃力に欠けている。

「それと、関係性が有るかはまだわからんが、近辺で昨日能力者に

よる殺人が二件おきとる」

「――関連性が有ると？」

「推測の域をでてはいんやけどね」

確信は無い、だがもしもそうなら問題だ、何人も殺す能力者は大概、もっと大量に殺す。

一度殺して止めるか止めないかで度合いが違う。

「それでな、今からちよいと街に言って欲しいンよ」

「犯人の搜索ですか？」

そや、と杏会長は呟き、俺とアリスさんと剣は賛成する。

暁だけは御影を探してくると行つて何処かに行った。

「幸也、お前も御影殿を探しに行かなくて良いのか？」

「明日にでも謝るさ」

「おぬしがそれでいいのならいいんだが……早めにした方がいいと思うぞ」

「私もそう思いますよ」

アリスさんも剣の意見に同意する、そうは言われても確かに隠していた俺にも非は有るが、

早急に謝るほどのことでもないきがする。俺が不思議そうにしていると剣とアリスさんは何か通じることが有るのか互いにため息をついた。

「それじゃ何処に向かう？」

「何処へと言われても当てが無いでしょう？ 結局は適当にぶらっ

くしかないんですよ」

昨日と一昨日で学習したのか、すぐさま返答が返ってくる。アリスさんが行った通り、行くあてなど何も無いために、ぶらつくしかない。俺達は適当に街を歩き回った。

結局その日は何も起きずに夕方になった。

「帰りましょうか」

「そうですね……」

アリスさんはへとへとだ、一日中歩き回っていたのだからしょうがない、剣は平然としているが。

俺も昨日の出来事のせいでまだ足が完治していない、日常生活に支障をきたすほどではないが

流石に長時間歩き回ったせいでかなり疲労がたまっている。

アリスさんはすぐさま迎えを呼んで帰っていった。

「さて、拙者たちも帰ろうか」

「そうだな」

俺と剣は帰る方向が同じな為、二人で帰る。

少し疲れているためにゆっくりと歩いているが、剣もそれにあわせてくれている。

「なあ幸也、少しお願いが有るのだからいいか？」

「ん？ 何だ？」

「いいや……ちょっとな………」

顔を赤くして剣が俯く、……そんな動作されたらこっちも恥ずかしいじゃないか。

剣は何かを決したような顔になる。

（まさか……愛の告白か？）

………雰囲気として有っている、まさか？ まさかなのか？
俺の鼓動が早くなる、来るか？ 俺に春が来るのか？！

「実は——手合わせして欲しいんだ」
「……………」

（ちくしょおおおおおお！）

やはり世の中は甘くない、今まさにそう実感した。

剣よ、そんな心配そうな目で見ないでくれ………いいや、わかってたさ、俺がもてないことぐらい！

「OK、解った」

「良いのか？ 今からだが問題はないか？」

不安そうな剣に俺は頷く、良いさ、少し動かないと悲しみでしばらくフリーズしそうだ。

だが何処でするのだろうか？

「まあ場所はあてが有るから付いてきてくれ」

そう言う剣に俺はついて行った。

第十二話（前書き）

投稿直後に誤字脱字を見つけたため修正。

第十二話

「ここは？」

目の前に建つのは少し寂れた感じもするが大きな道場だ。看板などが無いところを見ると経営はしていないようだ。

剣は鞘から鍵を取り出し扉を開ける。

「私の家がやっていた道場だ、今は何もしていないがな」

俺も中に入る、中は意外と綺麗にされている。

剣が時折使っているのかもしれない。

中は広く、二人で居るにはかなりスペースが余る。

竹刀等も大量に立てかけてある、昔は大人数でやっていたのだろうか。

「それでは始めようか」

「ルールは？」

竹刀を手渡され俺は確認と取る。流石に立てなくなるまでとかは無いだろう。

それに女性を竹刀で叩くことには抵抗が有る。

「どちらかが参ったというか、決定的な打撃を与えるか、寸止めかでいいだろう、能力の使用は任せる」

「了解した」

なら、俺がするのは寸止めか気は引けるが腕を狙って竹刀を握れなくするぐらいだろう。

とはいっても勝てるのかどうか解らないが。
能力も比較的使うつもりも無い。

見たところ構えた剣は素人目で見てもしっかりしている。
威圧感も半端じゃない。
気を引き締めて俺も構える。

「それでは始めようか」

「――勝てる気がしないな」

開始宣言と共に剣が距離を詰めてくる。

上段から鋭い振りと共に竹刀が俺の頭部目掛けて振り下ろされる。

右に軽く移動しそれをかわし、すぐさま剣の竹刀を持つ右腕目掛けて竹刀を振り下ろす。

なるべくモーションを小さくして、到達速度を上げ、威力を落とす。

剣は右腕を後方に回す、同時に裏拳の様に竹刀を振り、俺の後頭部を狙う。

すぐさま俺はしゃがみ、空打った剣の腕目掛けて下段から切り上げる。

剣は大きく後ろに下がり距離を取る。

「……やるではないか」

「それはどうも」

剣の振りは鋭く速いが、それだけなら何とかなる。

常時よりも高い身体能力が何とか反応、迎撃まで可能にしている。
長く戦えば少しずつ経験の差で押し切られるだろう。

（女性に負けるのもごめんだし、勝つには短期決戦か……）

「本気でいかせて貰おう」

剣が宣言する、それと共に空気が引き締まる感じが俺の肌を圧迫する。

多分能力を使う気なのだろう。

（正攻法では勝てないだろうなあ）

どんな能力かは知らないが、まともにやりあって勝てそうに無い。なら、俺は俺らしく戦わせて貰う。

「俺が勝っても卑怯なんて言っなよ」

臨戦態勢に俺も入る。普段なら本気になるなんて馬鹿らしいと思うのだが、

既に本能的に戦おうとしている。

今更衝動を抑えるつもりなど無い。

「いざ——参る」

言い終わった瞬間、先ほども速い速度で、一瞬で俺との距離を詰める。

鋭い横薙ぎの一閃が腹部目掛けて襲ってくる。

即座に俺は後ろに下がる、ギリギリで横薙ぎの一閃を回避し、反撃に移ろうとした瞬間——俺は即座に行動を中止し顔を右に傾ける。

鋭い風を切ると音と共に俺の頭の横を竹刀が駆け抜ける。

俺はすぐさま距離を取る。

「そりゃ無いぜ……」

確かに横薙ぎの一閃を剣は放っていた、そして腕は左から右への移動でまだ体の右側に有るはずだ。

だが、戻す動作も構える動作も無く俺の顔面に突きを放ちやがった。

「これが拙者の能力でござる」

そういえば、学園での扉を切った時も同時に切り刻まれていた。

そして、今のござる口調。

「腕を阿修羅みたいに瞬間的に増やしてるのか……代償はござる口調か？」

「その通りでござるよ」

嫌な能力だ、代償含めて何か嫌だ、本人はさほど嫌がつている様には見えない。

侍に憧れていると言っていたが、そのせいでなんとも思わないのだろうか？

「参るでござる」

またも剣が距離を詰めてくる、少し能力を模倣してやろうかと思っただが

まだ能力を模倣するのには条件が満たされていない。

上段からの斜め切り、俺が身をかわして避けると同時に、右から薙ぎ払いが襲ってくる。

鋭い一閃をしゃがんで交わし、反撃に写る。

何でも有りで負けることなど考えていない。

（路地裏喧嘩なら常勝無敗だ）

下段からの切り払い、確実に腕を狙う、それを剣は竹刀で防いだ。俺はそのまま竹刀を剣の竹刀とぶつけたまま、右足で剣の足を払う。寸での所でそれを交わした剣に、体勢の整っていないうちに更に薙ぎ払いを繰り出す。

それを剣は能力で増やしたのであろう腕が一緒に増えている竹刀で防ぐ。

（——やりにくいな）

手数で押しても勝てない。

なら——意表を突くしかない。

竹刀を引き戻し、もう一度薙ぎ払う、またも防がれるも、そのまま力任せに剣の竹刀ごと地面の方向に押す。

多少体勢が崩れた剣目掛けて、上段蹴りを繰り出す。

それも増えた腕で防がれる。だが俺はすぐさま竹刀を無理やり剣の体目掛けて振る。

だが、更に腕は増え防がれる瞬間——俺は竹刀を離れた。

離れた瞬間、それを防いでいた腕を無視して剣の胸倉を掴む。剣が驚いている。

その驚いた顔の額に思いっきり俺の額をぶつかる。

——頭突き。

想像以上に聞いたのか剣は後ろに倒れる。

俺もぶつけた痛みで額を押さえてしゃがむ。

「たあー、まじいてえ……」

「ぐう……頭突きなど卑怯でござる……」

「卑怯言うな……、それに竹刀だけで戦えなんて聞いてない」

「……屁理屈でござる」

剣も額を押さえて立ち上がる、俺もやはり額を押さえながら立ち上がる。

（我ながら無茶をしたもんだ……）

「まあいい、噂の贗者殿の実力確かめさせて貰った」

「能力使ってないんだけどな」

「……勝者の余裕を見せたいのか——まあいい、今日はもう帰って御影殿に謝るといい」

「そうさせてもらつよ」

俺は痛む額を押さえながら鞆を持って、帰路に着く。

家に帰って御影に謝らなければいけないらしい。

心配かけたのだから謝らなければいけない、激怒したことに対してはまだ理解できていないが。

何故あそこまで怒ったのか、その理由を考えているうちに家に着いた。

……そういえば、謝ると言っても何処に居るのがわからない。

暁が探しに行ったはずだ、見つけたかどうか聞こうと思い携帯を開いたところでメールが来ていたことに気づく。
どうやら暁からのようだ。

内容は聞こうと思っていたことと一致し、俺は家に入ろうとしていたところを急転換して、メールに書いてあった場所に向かった。

第十二話（後書き）

雨月さんからメッセージをいただきました。
ありがとうございます。

これからもがんばって更新して行きます。

第十三話

「遅いやん」

目的の場所に着いた俺を出迎えたのは暁だ、御影に気づかれないように小声で喋っている当たり気を使っているのだろう。

俺達が居るのは街角に有る寂れた公園だ。ブランコに座っている。怒って公園に来てブランコに座っているとは何歳なのか問いただしかかったが今はそれと頃ではない。

「お前も少しは機嫌直るように手伝えよ……」

「いやや、俺の仕事や無い」

手助けを求めたがすぐさま断られた。危険なのか？ そんなに今の状態は危険なのか？

お前が断るほど御影の機嫌は悪いのか？

「それじゃ俺は帰るから後頼んだで」

そういつて足早に去っていく、俺は諦めて一人で御影の下に行く。

「何のよう？」

不機嫌極まりない声で御影が言ってきた。もしかしたら暁と居た時から気づいていたのかもしれない。

「何でそんなに怒ってんだよ？」

「……怒ってない」

嘘だ。御影は俺と眼をあわせようとしない。体すらこちらに向けていない。

長い付き合いだ、怒っているか、怒っていないのかなどすぐにわかる。

「怪我したの黙ってたのは悪かったけど、怒るほどのもんじゃないだろ？」

「だから怒ってない！」

「じゃあ何でいきなり飛び出してっただよ？」

「な——なんだっていいじゃん！」

理由になってないといひ叫びそうになったがこちらまで怒鳴り始めては、一向に話が進まなくなる。

俺はなるべく落ち着いて話す。

「心配させたくなかったから黙ってたんだよ、お前だって怪我したらどうせ黙ってるだろ？」

「……………そうだけど」

「なら機嫌直せよ」

「……………」

御影が黙りこくる。俺も何もいえない。多分俺が今何か言うべきではない、勝手にそう思った。

「幸也はさ」

「ん？」

「いつも荒事なんて嫌いだって言うわりには、何か有るとすぐに首を突っ込むよね」

「そんなことねえよ」

「生徒会もそうだし、どうせ今回の事も結構乗り気なんでしょ？」

「それは」

——生徒会の事とかは……と言いつきをしそうになり、俺は口を閉じる。

確かに少し俺は行動と言動が矛盾しているかもしれない。

「……………私は幸也が荒事に巻き込まれるのは嫌、巻き込むのが好きなの」

「それは俺の意志を無視するのが好きだと？」

なんともまあ、唯我独尊な発言だ。

でも、そこが御影らしい。

「……………我俣だよね」

「我俣だけど……………お前だしな」

俯く御影に俺は御影の頭にポンツと手を置く。コイツは昔から何のも変わらないなあ……………。

でも、俺も変わってないのかもしれない。

「たまには俺の荒事にお前が巻き込まれるのもいいだろ？」

「たまにはね……………」

「今日はもう帰ろっぜ？」

「……………うん」

多分、こんなことで機嫌が直るのも俺と御影がガキだからだ。
俺と御影は二人で帰路についた。

「おっはよー！」

次の日、御影はいつも通りになっていた。

「朝から顔が暗いよ！」

その言葉と共に俺の背中を思いっきり叩いてくる。

……以前よりも元気かもしれない。

「その調子やとうまくいったみたいやね」
「まあな」

暁といつも通り校門付近で落ち合う。

「良かったな」

後ろから声が掛かったと思うと剣が居た。
俺と御影の様子を見てホッとしている。

無駄に心配をかけてしまったか？ でも、勝負を挑んでくるぐらいだったし

さほど心配していなかったのかもしれない。

「昨日は付き合ってもらってすまなかったな」
「適度な運動になってよかったよ」

御影が何の話？ と聞いてくるが、はぐらかした。
御影が少し拗ねるが、また変なことしてると思われるのも嫌だったので言わなかった。

(こつこつという態度が御影を怒らせているのか?)

そうかもしれない、そうじゃないのかもしれない、解らないけど
すぐには自分を変えられない。

俺達は教室につき、ホームルームが開始される。

ホームルームが終わると俺は昨日と同じくアリスさんに生徒会室
に来るように呼ばれた。

昨日と同じく俺達は生徒会室に向かう。

……………これ以上授業をサボっても大丈夫だろうか？ 主に俺の学
力面で……………

「失礼します」

生徒会室に入ると、珍しく真剣な顔をした杏会長が居た。

「ああ、まつとたよ」

その声になんか焦りが入っていたことに俺は言い様の無い不
安を覚えた。

第十四話

「これ見てみ」

急に杏会長から手渡された資料をみて見る。

そこには人の名前、場所、そして——死因。

それも大量に……、それに気づいた瞬間、杏会長に視線が集まる。

「見ての通り、昨日一日での殺人件数や、約12件」

「……………犯人は能力者ですか」

資料に載っている死因は、首を刎ねられたり

焼死や大量に切り刻まれ大量出血かショック死など通常では無理な死にばかりだ。

「風を使う能力者が居たって報告があるし、まず間違いないやろね」
「能力者の集団？」

「多分やけどね、二つ以上の能力を稀にもつとる奴も居るけど、三つは報告されてへん」

「私達が遭遇した風と焼死からして炎、後は何か威力の高い能力やな」

風の能力者は首を刎ねたりするほどの威力は無かったし、炎にも首を刎ねるのは無理だろう、

なら第三者が居ることになる。

「それに最近、怪しい奴の目撃情報も増えてるンよ」

そういえば、この間変な奴とすれ違ったな。

………暴君？ 二つ名なのだろうか、聞いたことのない名だ。
主………もしかしたら俺が見かけたのが犯人集団の一人だった可能性が高い。

（何を目的としている？）

何かをあの男は呟いていた「………だ、………そ、せ………を、能力者………にするのだ」とまでは聞き取れた。
だが重要な何かを聞き逃している。

「どうかしましたか？」

「あ………いいや、何でもない」

悩んでいる俺に気づいたのかアリスが声をかけてきたが、はぐらかす。

まだ推測の域を出ない、無駄な意見を出して思考を固めてしまわないようにしなければ。

「今日は今からちと街をうろついて貰うで、これ以上被害を出すわけにはいかん」

「賛成です、早めに対処しなければ」

無表情みただが異様にやる気のあるアリスさん、何故そこまで積極的なのだろうか。

………いいや、寧ろこんな事件を早急に解決しないといけないと思わない俺のほうがおかしいのか。

「今日は索敵範囲広げるさかい、二人一組な、暁と御影、私と剣、アリスと幸也や」

「りょーかい」

俺達はそれぞれ二人一組となって街に向かった。

「とりあえず余り人気の無いところに居ましょう」

「そうだな、路地裏や、目立たないところでの犯行が多い」

着いて早々俺達は歩き回る場所を決める。

もしかしたら今も何処かで犯行がおこなわれている可能性は高い。

「足早に行きましょう」

「あ……はい」

物音は余り立てないように、かつ素早く移動していく。
常に臨戦状態、神経が磨り減っていく。

（何でこんなことしてるんだろ）

疲れるたびに俺はそう思ってしまう。

理由何てたいしたものじゃない、ただ流されただけだ。

それに後で御影たちもやるからいいかと、更に理由を後付した。

（別に俺がやらなくても）

——誰か他の奴がやってくれる。

……………何て他力本願な……………。

でもそうは行かない。やると言ったのだ、少なくとも多少のやる気

を見せなくては……。

一度言った事を無しにするのは性分じゃない。

（俺が行動してるのはどうせそんな下らない理由だ）

……なら——アリスさんは？

入学式の時点で生徒会へ入ることが決まっていた？

何故？ 成績が一番だったから？

いいや、強さこそ求められているのだ、成績は関係ない。

なら——何故？

（下らない……今はそんなこと関係ないじゃねえか）

今、アリスさんは俺の前で必死に搜索している。

なのに俺は何だ？ 下らない考えが頭を支配している。

（らしくないな）

その考え一つで俺は今までの思考を停止させる。

考える必要はない、考えるにしても今じゃなくたっていい。

今やるべきことはいち早く犯人を捕まえることだ。

俺がやる気を出した瞬間、目の前のアリスさんが急停止する。

「……どうかしましたか」

「前を見てください」

俺はすぐさま前方を確認する。だが特に何も無い曲がり角が有る

だけ。

「ありゃー？ 気づかれちった？」

「私は防御型の能力のオマケで少しばかり感覚が鋭いので」

曲がり角から出てきたのは赤い髪をした青年。歳は俺と同じくらいだろうか、背丈も同じくらいだ。

格好はラッパ―気取りかちゃらちゃとした服装が目立つ。

「そつかそつか、君が噂のアリスちゃんかあゝ！ ラッキー！ さつさと始末させてもらうよーん」

後ろの男は誰か知らないけど一緒にあの世へレッツゴー」
「狂ってるな、コイツ」

男は右腕を振りかぶったと同時にこちらに向けて振りかざす、それと同時に男の手の先から炎が出現する。

「も・え・ち・れ」

男が満面の笑みで言うと、炎が増幅され——こちらに向かって動き出す。

「私の能力では炎自体は防いでも熱は防げません、囲まれたら干乾びるまで熱せられます」

「了解」

なら、俺がアリスさんを抱えて避けるしかない。

イミテーション
(模倣旋風)

「捕まっけてくださいね」

俺はアリスさんを抱えると少し広めの路地裏を駆け回る。炎が迫ってくれば避け、更に追ってくれば壁を蹴り移動し、避ける。

「ちょこまかとにげてんじゃねえーよ」

男に近づこうにも、うまく炎を捜査され近づけない。だがこちらは掠める炎の熱で徐々に体力を奪われていく。

（能力の限界時間も有るし早めにやらないと）

力をセーブせず、全速力で駆け抜けて男に近づけば近づけるが、その後が問題だ。

俺が倒れると防御力には定評が有るアリスさんも、攻撃面では心もとない——というよりも無理だろう。

どうする？ 逃げるか？ 危険を冒して戦うか？

俺がそんな焦りを覚えている中、アリスさんの視線は常時あの男へ注がれている。

（逃げる気はなさそうだな）

俺は腹をくくり、追いついてきそうな炎を避ける為、速度を上げた。

第十五話

（ここまで炎を操れるやつなんて始めてみたな……）

炎を操る能力者事態はあまり珍しくはない、ただ長時間安定した大きさでここまで操れる能力者は始めてみた。今もギリギリのところであわしてはいるが、だんだんと炎の速度が遅くなるのではなく加速していつている。

尻上がりなのかはたまた遊んでいるだけなのか。

（――前者だといいたが）

これ以上早くなってくると流石にきつくなってくる。一人抱えて避け続けるのにも限界が出てき始めている。逆転の策はない事はない。

「アリスさん、あいつ一定空間にある炎を操作してると思いますが？ それとも自身で出した炎だけだと思いますか？」

「……………前者じゃないでしょうか」

前者か後者かで圧倒的に戦略が変わってくる。

前者ならば最初に手のひらから出した炎以外も操れるが、後者なら自分で出した炎だけしか操れない。

多分、普通有能力者なら戦う上で後者のほうが圧倒的にやりやすいだろう。

「あいつの能力に名前を付けるなら何にします？」

「…………え？」

だけど

「だから名前を付けるなら何にします？」

「今する会話ではないでしょう！」

「今する必要があるから言ってるんです！」

俺は贗物　フェイカー　だ。

「早く！」

「火達磨でいいです！」

「了解！」

模倣するなら強ければ強いほうがいい。

「おい火達磨！」

「誰が火達磨だってえ？　おーい？」

（条件は整ったはずだよ、な）

見る限り発動条件も無さそうだ。

先ほどから火達磨使いも何も行動を起こしていない。

贗物の発動条件は3つだ。

1つ、その能力を直接見ること。

2つ、能力にかかる条件があるのならば知ること。

3つ、その能力に自分以外の人間最低一人以上が名を付けること。

二つ名ならば直接見れば2や3は自ずと情報が周りから入ってくる。

「正念場です、一気にいきます」

「火事場の間違いでしょう」

どちらでもと呟き、一気に俺は加速する。

限界値は超えてはいけない。炎を強制的に振り切り、地面にしっかりと立つ。

（大博打だな）

炎が方向を変えてこちらに向かってくる。

「燃え尽きるよカス」

眼前に炎が迫ってくる。

（――模倣 イミテーション 火達磨）

――炎は………

「どーなってるんだよ、おい？」

俺無視して横を通り抜けた。火達磨使いはただ呆然としている。

「まあいいやもういつちよお」

再度炎を生み出し、こちらに向けてはなってくるが、やらせはない。

俺も能力をフルに生かしこちらに向かってくる炎を静止させる。

（一定領域内の炎を操るほうでよかった）

もしも違ったら相手の炎を止められはしなかった。

「賭け事の好きな人ですね」

「偶々です」

火達磨使いの顔はすでに凍りついている。

俺の能力を知らなかったのだろう。完全に驚いている。

「第二ラウンドといかせてもうか」

俺は制御の鈍くなった炎を無理やり上空にやり、相手との距離を走って詰める。

「接近戦といこうか！」

男の顔面に渾身の拳を叩き込む。男はそれを何とか腕で防ぐと一気に距離を開く。

能力の続く約10分間は炎を受けない。

ならその間に決めるしかないが、この男が何処までできるかが問題だ。

同時に他の能力を模倣して早期決着もあるが、戦闘不能にまで追い込めなかった場合敗亡くだ。

最低でも逃げられるだけの体力は残しておかなければならない。

男の右の拳が俺の顔面目掛けて放たれる。
だが圧倒的に遅い。

（接近戦慣れしてない？）

体を横にそらし避けた瞬間、すぐさま相手の腿を右足で横薙ぎに蹴った。

相手の上体が少し沈みかけた所に、右の拳で鳩尾を殴る。強制的に前かがみになる男の背中に

俺は右足で踵落しを決めようとした瞬間——左足を突風に持つていかれる。

倒れる瞬間に手をつき、後方へ下がる。

そこへまたも風が襲い掛かるが、今度は後方にいるアリスさんによる盾で防がれる。

「——風使いかよ」

「そのようです、かなり察知しにくいいため、私の盾は余り期待しないでください」

そりゃ目に見えにくいものを感覚だけで防ぐなんて至難の業だ。

（逃げるしかないよなあ……）

先ほどまで血の上っていた頭も冷えてきている。

優勢から一気に劣勢へと変化した。

アリスさんはまだ戦う意思があるようだが、無理やりにでもつれて逃げさせてもらう。

瞬時に俺は逃げる算段を立てる。

「形勢逆転だねえ」

男が笑った瞬間——俺は頭の中で考えた作戦を決行に移す。
炎はすでに男は操る様子がない、なら能力を瞬時に解除し

（模倣 イミテーション 雷神）

電撃を一瞬だけ出力最大で迸らせる。閃光代わりの代用品だ。
発動と同時に目をつぶった俺以外——アリスさんも含め男の目をくらます。

俺は全速力で男に駆け寄り顎に渾身の拳を叩き込んで戦闘不能にさせ、襲ってきた風を避けながら
いまだに目がくらんでいるアリスさんを抱えて逃げ出す。

「誰です！」

「俺ですから大人しくしてて下さい！」

俺は路地裏を駆け抜けていく。幸いな事に風は長くは追ってこなかった。

第十六話

「あゝ……………少しやばいかも」

俺は全身に極度の疲労感が襲っている。短時間に連続で三回能力を発動したからだろう。

御影の能力はもともと体に負担をかけるし、他の能力も模倣するためになんり負担をかける。

そんな訳で、俺は風から逃げ切った直後に地面に座り込む。

「大丈夫ですか？」

「意識もあるんで何とか……………とりあえず暁とか呼んでもらえます？」

「了解しました」

携帯で連絡を取り始めるアリスさんを見ながら俺は座るのも嫌になり、汚れるのもかまわず横になる。

意識はしっかりしているため、そこまでではない。以前に4個連続で使用した際に倒れた記憶がある。

「少し時間がかかるそうです」

連絡を終えたのかこちらに視線を向けてくるアリスさんが話しかけてくる。

僅かに怒りと戸惑いの視線が混じっている気がする。

「貴方は何故……………何故こんな事をしているんですか？」

「こんな事？」

「先ほどのような危険な仕事です、貴方は別に断れる、別に……………」

…無理してやる必要はないですよね？」

「確かにやる必要は無いですね」

少し前に考えていたことだ。流されてやったことだ。別に正義感なんてこれっぽっちも無い。体が勝手に動いたなんて理由にならない。

（危険を冒す必要なんて無い）

じゃあ何でこんな事をしている？

「じゃあ何故？」

自分自身に問いかけても答えなど出ないのに、他人に聞かれて答えが出るのだろうか。

「アリスさんはどうしてです？」

「え？」

「アリスさんには何かあるんですか？」

（卑怯だよな）

自分で答えが出ないから、アリスさんに聞き返している。

「私が裕福なところで育ったのは知っていますね？」

「ええ、まあ」

どこかの財閥のお嬢様、入学初日に暁に聞かされた気がする。俺はだるい体を起こす。

「私は小さいころからそれを不公平だと思っていました」

「不公平？」

「生まれた所が良かっただけ、運だけでそれからの人生が圧倒的に変わってしまうことがです」

「でもそれは……しかたがない」

「確かにその通りです、でも私は嫌なんです

だから私はせめて誰もしないような嫌な事を進んでやりたいのです」

「償いのようなものですか？」

「そうです、ただの自己満足ですけどね」

アリスさんは何処か遠くを見ている。

なんとも立派な理由だろう、ある人は多分笑い、ある人は感動するそんな理由だ。

なら自分はどっち側だ？

「笑ってください、馬鹿みたいだと、ただの自己満足でしかない」と

「——笑えねえ……」

「——え？」

「少なくとも俺は笑えない、何も考えてない人間に笑う資格は無い……俺はアリスさんのような理由もないし、理由を作ろうともしなかった」

考えるのが面倒だった？　ただ思いつかなかった？

どちらもただの言い訳でしかないし、そんな人間が何かに向かって行動する人間を馬鹿にしているはずが無い。

——でも少しだけ理由ができるかもしれない。

「でもそんなだめな人間だからこそ、アリスさん以上の馬鹿になれ

る」

「馬鹿になれる？」

「俺は別に裕福でも何でもないけど……アリスさんの手伝いがしたくなった」

正義感？ そんないい物じゃない、ただ俺の目の前で寂しそうな目をしている少女の近くに行ってみただけだ。

——らしくない、多分普段の俺を良く知ってる御影や暁なら必ずそついうだろう。

自分だつてそう思つてる。ただ目の前の少女の為に自ら荒事に巻き込まれようとしているなんて。

「……遠まわしに好意を伝えられているみたいです」

「そ……そんなこと無いぞ！」

ははは……と苦笑いしながら必死に否定する。でもまあ……そんな感じに我ながら変な風にいつてしまった気がする。

「馬鹿な俺だけど、多少は力になれると思うんだ……多分」

「最後に多分を付けなければ即感謝の言葉を述べてたんですね」

「じゃあ多分を取り消してください」

「嫌です——でも、素直に感謝はします、こんなつまらない女の手伝いをしてくれることを」

アリスさんはそつと優しく微笑んでいる。今までに見たことの無い表情で。

いつも俺が見ているアリスさん無表情が少し怒っていた、そんな表情も良かったなんて言ったら変だろう

でも、微笑んでいる姿は素直に良かったつて言ってもいいと思う。

（はあ）……御影に怒られそうだな）

こんな面倒なことに自ら首を突っ込むと約束したのだ。
でも、御影なら許してくれる気がする。多分暁も。

「では、今回のこの事件も精一杯頑張ってくださいませよね？」

「アリスさんが頑張るのなら」

「私はいつでも頑張っています……、後……その……」

いい加減その余所余所　よそよそ　しいしゃべり方止めませんか
？」

「そうだな、俺もあんまり仲間に敬語つてのもすかないし、このさいだからアリスと呼び捨てにさせてもらう」

「それでは私も幸也と呼ばせてもらいます」

少し恥ずかしそうに言うアリスを見て俺も少し照れてしまう。

入学式から幾日かたったが少しは仲良く慣れただろうか？

そんなことを思っていると遠くから御影たちの姿が見える。

「げえ！　何かあまーい感じの空間になってるんだけど名にやったのよ幸也！」

即効で何を思ったか御影が俺にドロップキックを仕掛けてくる。

今の俺によけられるほどの体力は無く思いつきり直撃する。

「おま……こっちは倒れそうなんだぞ！」

「幸やん、何やこのあまーい空間は？」

お前までも言うのか暁……

この後俺は散々御影にボコられた後、何故か後できた剣にもしばら

く睨まれていた。

第十七話

「ああ……………体中がいてえ……………」

杏会長に報告を終え、一日を終えた俺は家に帰りすぐさまベッドの上に寝転がる。

体中の筋肉が悲鳴を上げていたりとかかなりきつい状態であるが、昔から何度も同じ症状を味わっているので

何とか耐えることができる。最もひどい時など三日間ほど寝込んでいたときもある。

もそもぞと痛む体を動かして仰向けになる。

（甘いよなあ……………）

最近のことを振り返って思うのはそれだ。

昔から御影の荒事とかに付き合っていた時点で他人に甘かったのかもしれない、

ただ、最近はそれよりも圧倒的に甘い気がする。

剣もそうだがアリスにあそこまで積極的に協力するなんて甘いのかもしれない——いいや甘い。

（惚れてるのか？）

——自分自身に問いかけるが、答えは解らないとしか返せない。馬鹿馬鹿しい……………それよりも考えることがあるだろうがと思考を止め、別のことを考える。

考えるのは今日の出来事の事だ。

殺しまわってるのは結構なやり手だ。炎を操る奴に風を操る奴、それに加えて結構威力を持った攻撃ができる奴。

もしかしたらもつというかもしれない。

今日のことと俺の能力も知られただろう。アリスの能力が知られていたことからして御影達の能力も割れているだろう。

(こっちは把握し切れていないんだがなあ……………)

早めに捕まえなければ圧倒的不利になってくる。

あれだけの能力者がいると一般人では何もできない。いや、普通の能力者でも間違いなく負けるだろう。

風の能力者の姿も発見できてない。解ったのは敵の能力者一人だけ。

まだ黒幕の姿どころか能力……………どんな人物かすら解ってない。

(……………眠いな)

無い頭絞りすぎたのか異常な眠気が襲ってくる。

疲れているせいもあるだろう。これ以上睡魔を強くすると眠ってしまいそうなので思考を一時停止する。

痛む体を起こしシャワーを浴びてもう一度ベッドに寝転がる。

多少は眠気が覚めたがやはり思考を働かせようとすると眠くなる。

結局俺はそのまま眠ってしまった。

次の日、俺は御影たちと学園につくなり、教室には向かわずそのまま生徒会室に向かう。

既に杏会長とアリスが居た。その表情は暗い。

「昨日も何件か起きてますか？」

「そや、一昨日よりは少ないけどな、それでも十分な数が襲われている」

「……………人数を増やしたりはできないんですか？」
「無理やな、二年と三年は別件にでてるし、一年で戦力になりそうなのは声かけとるがだめっばい」

そうですかと呟き俺は黙る。

増援が無いなら昨日と同じ方法を取るしかできない。

結局俺達は昨日と同じく街を回ることにした。

昨日と違うのが回るメンバーで今日は俺と暁のペアで街を回ることになった。

「幸やんと二人つきりなんてめったにないのお」

「変な感じに言うんじゃねえ、そりゃだいたい三人で行動してたからな」

人気の無い道をひたすら歩く。大通りの方も連日の事件で人気は減っているがまだ多い。

流石に大々的に犯行に及ぶことは無いだろうとの事から今日も路地裏などを中心に回っている。

「なあ幸やん」

「何だ？」

「剣ちゃんとアリスちゃん、はたまた御影どれが好みなん？」

「……………ナンノコトダ？」

俺は思わずこけそうになる、いきなりその話題を出してくるなんて事態の状況が解ってないんだろうか……………。

「黙々と探して見つかるってもんやないし、だったらちと楽しくいこうや」

「考えてたことを読むんじゃねえ」

「まま、きりきりはけや、どれを選んでもうまくサポートしてみせ
っから」

馬鹿馬鹿しいと思いながらもついつい三人を思い浮かべてしまう。
ベツニドウトモオモツテナイカラナ。

「さて……………本題に入ろうや」

「本題なんてあったのか？」

あるならさつさと言ってくれよ、妄想が爆発するところだった。

「まあ急ぐことでもないやん」

「うるせえ、さつさと本題に入れ」

「いやな、ちいと作戦があるんやけど、のる？」

「聞いてからだ」

「ノリ悪いのう、まあいいわ、説明したる」

第十八話

「今はちと人数不足で走りまわっとるわけやん」

「そうだな」

「その人数不足を一気に解決するすべがあるんよ」

ほほう……それはそれは大変すばらしい案だなと俺は言うが、内心余り期待できなくなっている。

暁の野郎が、にへら顔でこちらを向いているため全く信用ができない。

「……………で？ どうするんだ？」

「簡単やよ、そこら辺の奴を適当に捕まえればいいやん」

「いやいや！ んなことして犯人に出くわして襲われたら無意味じやねえか！」

「能力者を捕まえればいいんよ」

「どうやって協力を仰ぐんだ？」

「そりゃあ……………暴力？」

「お前の脳内がまともじゃないことを考慮して話す必要があるな」

やはりまともな意見を出さない。

人数不足を補うのは確かに重要だがそれで死人が出たりしたら元も子もない。

「そんじゃあ……………聞き込みとかどや？」

「何か犯人追ってる感はあるが早々情報なんて入ってこないだろう、というかここら辺に人いないぞ」

「何言うとるん、人なら仰山いるやん、主に不良 チンピラ が」

「そんな奴らが素直に教えてくれるのかよ」

「そこはまあ――」

「暴力……か」

「わかってるやん」

お前の事だしなと呟き俺は一応考える。暴力で聞き出すのは良くないが

情報を集めることに関してこちら辺にたむろすことが多い不良どもに聞くのは間違っではない。

だからといって確実性があるわけでもないが、ただ走り回るよりもいいかもしれない。

「しょうがない、聞くだけ聞いてみよう、話さなかったら無理やりもしようがない」

「お任せを幸やん」

その後、俺と暁は近くで屯していた不良どもを見つけて聞き込みを始めた。

結局、暁が全部暴力で聞き出したが、今はしょうがないと諦めるしかない。

「赤髪の男ならさつきあつちに……」

何件目かで見事に情報をゲットした俺と暁は即効でその場所に向かった。

「やっぱ効果てきめんやん」

「偶然だろうが」

赤髪が向かったという場所に全速力でかけていく俺たち。走りながら御影たちに連絡を入れる。

「居たぞ！」

ある程度走ったところで赤髪の男を発見する。

男の横には少女が立っており、その目の前には30代後半ぐらいの男性が居る。

（ギリギリ殺害前か？）

赤髪の火達磨使いと隣に居る少女がこちらに振り向く。

俺と暁は即効で距離を詰めて殴りにかかる。火達磨使いの炎は強力だが距離を詰めてしまえば問題はないはずだ。

あちらもこちらが敵だと即座に認識したのか少女の方がこちらに手を翳したと思うと風の刃が飛んでくる。

（こいつが風使いか……………）

真正面から飛んできている風を横に飛んでよけ更に距離を詰める。

（模倣 イミテーション 旋風）

能力発動と共に一気に加速する。少女と男は既に風がよけられた時点で後退しているため

襲われていた男性を抱えて少しばかり距離をとった場所に避難させる。

暁は既に火達磨使いとの距離を詰めて格闘戦を繰り広げている。

ただの格闘戦だったなら暁が圧勝するだろうが、男の方が微妙に小さな炎を出したりと抵抗するため押し切れて居ない。

「能力使わないのかよ?!」

「俺の能力は発動条件がかなり厳しくてしようできんのよ、まあそんなんなくても勝つかから気にせんといて」

余裕ように会話をしている暁だが、能力者相手に能力を仕えない状態は危険だと判断し

俺は加勢する為に暁の下に向かおうとしたが、俺の目の前に風の刃が通過して邪魔をする。

先に少女の方を片付けようと思い俺は距離を詰めようとするが、想像以上に風の刃が的確に俺を捉え

襲ってくるためになかなか近づけない。以前よりも近い距離にいるから威力も上がっているようだ。

それでも怪我覚悟で突っ込めばいけるかも知れない。

(行くか?)

余程の事が無い限り成功するだろう、全速力で突っ込んで殴った場合かなり少女へのダメージがでかいが

殺人犯相手にそんな躊躇もする必要は無いだろう。

「暁! 一気に終わらせるからすこしまつてろ!」

俺は叫ぶと一直線に少女の下に向かう。風の刃で体を切り刻まれるがやはり威力は圧倒的に低い。

確実に一発で戦闘不能にまで追い込む一撃を叩き込むため拳を振り上げ——少女目掛けて突き出す、が。

「——却下だ」

突き出した筈の拳は少女の目の前で止まる。先ほど助けた30代後半ぐらいの男の渋い声を聴いた瞬間に……。

俺はすぐさま驚愕に打ちひしがれる思考を切り替え後方に無理やり飛び去る。

着地しようと体制を整えようとしたとき――

「却下だ」

またも男の声が響く、その瞬間、体制を整えようとしていた体が一気に固まる。

地面に激突する寸でのところで俺は手を突き更に後方に飛んで着地する。

「……………どうなってやる？」

あの男の却下という声を聴いた瞬間に俺の行動が止まる。

圧倒的な一方通行な能力だが……………

「能力が使えるのは20年前ぐらいから生まれた人間だけなはずだ？」

それ以上上での能力の発現は報告されていない。

だから最高でも年齢は二十歳ぐらいだ。だが見るからに男は30代後半ぐらいだ。

「さあな？ まあ貴様には関係のないことだ」

「だな……………あんたをとっ捕まえれば問題は無い」

俺は戦闘態勢に入ると風を操る少女が男の前に守るように立つ。

「我等が暴君にお手をわずらわせるまでもありません」

「良い、若輩者に実力の差を思い知らせるのも年寄りの役目だ、最も……さほど変わらんはずだがね」

「了解しました」

押しのけるようにでてきた男に忠実に従う少女。

俺は一気に距離を詰めるため前方に走り出そうと脚に力を込める。

「却下だ」

またもその一声で俺の体の動きが止まる。それに危機感を感じ後方に飛びのこうとしたときには既に硬直は取れていた。

（想像以上にやばいな……）

どうやらあの掛け声一つで俺の行動を拒否できるらしい。

おかしいなんてレベルの話じゃない。そんな声一つで他人の行動を拒否できるなど馬鹿げている。

「いいぞ、その恐怖に歪む顔……貴様の能力は知っている、真似る為の詳しい条件は流石にわからんがな」

「へえ……そりゃ光栄で」

あの男の能力が何処まで干渉してくるかが問題だ。もしも俺の能力発動にまで干渉してくるようならば

圧倒的に不利だ。どうやら体の行動は他の行動をすることによってすぐさま硬直は解けるが

能力が発動できないとなるとかなりつらい。

（拒否された瞬間に他の行動をとることもつらいんだが……）

さて、どうする？ 火達磨使いと暁はいまだに戦っていてこちらに氣を使っている余裕はなさそうだ。

なら俺一人でどうにかするしかないが、流石にこんな化け物を一人で相手にする自信は無い。

それに少女はこいつのことを暴君と呼んだ。そのワードは前に聞いたことがある。

今回の事件からしてこいつが親玉だろう。なら逃がすわけには行かない。

それに御影たちにも連絡してあるから、時間がたてば此处にかけつけて来るはずだ。

（時間を稼ぐべきか）

「おいあんた、何でこんなことをしている？」

「時間稼ぎだと解りきっているが、答えてやろう」

どうやら絶対的な勝利は揺るがないとでも言いたいのだろう。

まああの能力相手に勝つ自信は無いが。

「と、思ったのだが止めておこう」

「な！ おい、最後まで話せよ！」

「時間稼ぎが目的なのだろう？ ならその目的は果たされているぞ」

背後を振り返ると御影とアリスが此方に向かってきていた。

これで三対二、有利になったはずだ。どうやら掛け声が必要な能力らしい事から判断して

息継ぎの一瞬があるのだから俺と御影の速度なら問題ないだろう。

「三人相手ではもの足りんがまあいい、かかって来るといいぞ」
「お言葉に甘えてそうさせてもらいますかね」

御影とアリスは状況を理解できていないようだが、御影にはすぐさまアイコンタクトでなんとなく伝わったのか、俺が男に向かって走り出すと同時に御影も走り出した。

第十八話（後書き）

久々の更新になりました。

………長期休暇は人を駄目にしますね。

時間が有るとついついゆっくり書いてしまいます。

これからはもう少し早く書いていきたいと思っています。

第十九話

殴りかかろうとする俺と御影を男はお得意の能力を使って止めようとしないうとしない。

それでも躊躇することなく俺は男を勢いを乗せたまま殴る、が。

男はそれを難なく片手で掴み取る。

（——ありえない）

圧倒的速度で向かってきた事に反応するだけならず、高速で迫ってくる拳を片手で受け止めるなんて常人ならば不可能な領域だ。

俺が驚いている間に御影が距離を詰め、でたらめな速度で蹴りを放つ。

「——却下だ」

その一言で御影の動きが止まる、御影が声も無く驚いている。まだこの能力を知っているのは俺だけだった。

先ほどこの場に来た御影達は知っていないが、説明する暇も無い。俺は次の能力は発動する前に捕まえていない方の手で殴りかかる。

だが、それすらも容易に男は止める。俺はすぐさま手を振り解こうと動こうとした時

「却下だ」

全身が一瞬硬直する、だがすぐさま他の行動を取ろうと俺は動こうとし

——男から懇親の頭突きを額に受けた。

「っう！」

飛びそうになる意識を無理やり起こし、手を何とか振り解こうとしたところで

いつの間にか起き上がっていた御影が男の腕を蹴り上げ、何とか男の手から逃れる、が

男が俺に対してではなく御影に能力を発動し、御影の動きを止めた後、回し蹴りを御影の腹部に直撃させる。

後方に大きく飛ばされた御影を見た瞬間、男の拳が俺の頬に突き刺さる。

激しい痛みとともに男の声が脳に伝わる——却下と。

吹き飛ばはずの物理法則さえ無視して動きが止まる。

殴られ覚醒しきらない感覚のなか、男が腹部に渾身の拳を叩きつけてくる瞬間を呆然と眺める。

防ごうとする思考すら生まれないまま殴られる。

さらに追撃の一撃が迫ってくる——が、アリスの能力であろう不可視の盾に阻まれる。

今まで手を出さなかったのは高速すぎる戦闘についていけなかったからだろうなと無駄な事を考える。

意識が朦朧として集中できない。くだらないことが頭を占める。

「……………」

男がアリスの方を向くと同時に無言で歩き始める。

アリスが危険だと頭が叫んでいる、その意思に体がついていかない。ゆっくりとアリスに近づいていく男を漠然と眺める。

（——戦わないと）

アリスでは敵わない、多分俺がやっても敵わない。なら見捨てて逃げればいい。

全速力で駆ければ逃げられる——アリスを見捨てればいい。

俺がやられるか——アリスがやられるか。

意識が朦朧としている。

そんな中でも単純な計算だった。

「まてや、おっさん」

震える足を叱咤して無理やり立ち上がる。

「大人しく倒れてればいいものを」

「男が女を守るのは当然だろう？」

くだらないプライド、でも最も大切な事。

こちらをゆつくりと向いてきた、男に全身が危険だと告げている。

膝が笑っている、拳が恐怖で震えている。

それでも確かに立っている。まだ守ることができる。

勝率は限りなく低い、なら、全員無事に逃げることに集中すればいい。

ここで倒すなんて馬鹿なことを考えてはいられない。

御影の方にアリスを連れて逃げると眼で伝える。付き合いの長い御影はそれで理解してくれたようだった。

その証拠に俺が動き出した瞬間、アリスを抱えて暁の方に駆け抜けていく。

「必ずあんたも逃げ切りなさいよ！」
「当然だ！」

御影たちの方を向いた男に全速力で接近する、すでに御影の能力は切れている。

能力ありで敵わなかった相手に無能力で挑む恐怖が襲う。大声で叫ぶことで無視しながら突っ込む。

狙うは足、移動能力を減らせば逃げられる確立は格段にあがる。棒立ちの男の足の蹴りを入れる、が

即座に能力で動きを止められ逆に男の蹴りが俺の脚に直撃する、俺は激痛を無視し

完全に無防備な男の腹部に渾身の一撃を叩き込む。

能力発動と攻撃時にできる隙を完全に突く一撃、さすがに聞いたのか男は多少よろける。

追撃をかけようと右足のハイキックをこめかみ目掛けて蹴りだす、それを男は左手一本で防ぐと

同時に右手で俺の胸倉を掴む、引き剥がそうとした瞬間に男の左拳が俺の顔面を捉える。

飛びそうな意識の中俺は即座に左足を男の顎目掛けて蹴り上げる。直撃するが男は気にせずもう一度俺の顔面を殴る。ダウンしそうな俺にさらに左手で男は殴ってくる。

圧倒的なタフさ、男はそれを持っている。

さらに実力差も如実だ。すでに逃げることもすらできない。

正確には立つ事すらできない。意識が飛びかけて能力を使う為に精神をさけない。

「大人しくしていればこんなことにはならなかったというのに」

哀れみを含んだ男の声。

(…………ちくしょう)

意識があるだけで奇跡と言った状態の体、奥歯を噛み締めるしかできない状況。

アリスたちは逃げただろう、だが俺がまだ逃げ切れていない。

それは敗北、何もできない状態がそう言っている。

男がさらに拳をぶつけてくる。

完全に意識がなくなりそうなか、一人の少女の後姿と声が聞こえた気がした。

そこで俺の意識は完全に消えた。

第二十話

眠っていた意識が覚醒し、俺は目を覚ました。
あたりを見回す限りどうやら病院の個室の一つの様だ。
俺は顔や体中をぺたぺたと触る。

（生きてるよな？）

敵の前で意識をなくし、無防備を晒してしまったにかかわらず生きています。

安堵感を覚えるもすぐさま、あの男の圧倒的な力に恐怖を覚える。
人数では勝っていたのにあっさりとやられた、そう——何もできずに。

「起きたんか」

急にドアが開いたかと思うと杏会長が入ってきた。
その後ろに剣やアリスなどのメンバーがついてきている。

「ええまあ、どれくらい寝てました？」

「丸々二日くらいやな」

二日……確かにそれだけ寝ていれば能力を使用したときの反動も消えているわけだ。

体は軽いが、心が重い。

「……状況は？」

「全く改善しとらん、まじめに危ういわ」

「そつえば……助けてくれたのは会長ですか？」

意識を失いかけたときに見た少女、多分その子のおかげで生きて
いるのだろつ。

ならお礼を言わなければならない。

「私やけど私や無いよ」

「どつという意味ですか？」

「そつという能力つてことや」

二重人格系だろうか？ 問い詰めるのもまずいと思いありがとう
ございましたとだけいい、後は黙る。

アリスがこちらを不満そうに見ていると思うとゆっくりと近づいて
きた。

「会長が助けに来なければ死んでいましたよ？」

「そつ……だな」

「約束破るつもりだったんですか？」

「………すまん」

これに関しては弁解の余地が無い、無謀な約束をしたといまさら
思つても全く無意味だ。

謝つて許してくれるかどうかはわからないが、言わないよりはまし
だろつ。

「今度からは守ってくださいね」

あつさりと引いたアリスに驚きながら、俺は了解といい、今後気
をつけようと思つた。

「これからどうします？」

自然と口から出たのはこれだった、不安が完全に現れている。

「たおさんきゃならんよ、あの男をね」

「勝てるの？」

珍しく弱音を吐いたのは御影だった、不安そうに下を向いている。後ろに居る剣や暁たちも不安そうだ。俺だって不安だ。

「勝たなきゃならんよね、私らの仕事やし」

「会長は俺を助けたときどうしたんですか？」

「ああ、私の能力はもう当てにならんよ、一発限りのみたいなもんやから」

唯一対抗できたらしい会長もこれで戦力外、俺も負けているし他のメンバーでもだめだろう。暁の能力も多分発動できない。

「頼りは幸也やね」

「俺……ですか？」

「戦闘能力ではトップクラスやからね、それでも太刀打ちできんみたいやけど……」

「ええ……あいつの強さはおかしいです」

能力者であることが驚きであるのに、能力者以上の身体能力を誇っている。

明らかに異質、部下達に暴君と言われるだけはある。

それだけ絶対的で圧倒的である。

「降りたいのなら降りてください」

不安そうにしているメンバーにアリスが言う、逃げたいのなら逃げろと言っている。

誰か他の人が倒してくれると信じて？ 尻尾を巻いて逃げるのか？

「降りるはず無いじゃない！」

颯爽と反発したのは御影だった、完全に先ほどの不安は消し飛んでいる、暁はそれを見て

降りようなどと考えるのをやめたようだ。

剣もまた御影につられていて。

そして俺もまた、逃げるわけには行かない、手伝うと勝手ながらも誓っているのだから。

「それじゃあ今日も調査しよか」

病室を出て行くメンバーに俺はベッドから降りてついてく。

倒さなければいけない、多分、俺にしかできないのだから。

最終話

「居場所は特定できてるんですか？」

「詳しくは特定できてないですが、目撃情報の多い場所などからある程度は割り出しています」

なら探す手間は省けそうだが、最も探し出した後が問題なのだが。絶対的な能力を打ち破らなければならない、破ったとしても肉体的能力も完全に負けている。

相手の能力を封じつつこちらの能力を使わなければ勝てない。封じて殴る。

至極単純で最も難しい。

「何か手があるんですか？」

「それが全く無い」

目的地に向かいながら聞いてきたアリスに率直な感想を言う。今の状態は封じて殴るではなく、正反対の封じられて殴られる状態だ。

「会長も暁も頼りにならないし、総合的に完璧に劣ってるからな」

「……………わかってて逃げなかったんですね」

「まあ、ね」

「もうすぐ着くぞ」

前を歩いていた剣が教えてくれる。

その隣には会長が居るが、あくまで戦闘には参加せず道案内だけらしい。

後ろには暁と御影も居る。こちらは炎やら風やらを使う奴らの相手

をするために来ている。

アリスと剣は他にも敵が居た場合のメンバーだ。

少し歩いたところで会長が歩くのをやめて立ち止まった。
その真正面にはいかにも怪しい建物が建っている。

「何か、いかにも悪役ですよ見たいな感じの建物ね」

「確かにそやなあ、でもまあ何でもいいやん」

話しながら御影と暁が左右に別れていく。
その先にはそれぞれ人が居た。

「どうやら誘っているらしいな」

相手の親玉はどうやらこちらの作戦をくんでくれるらしい。

「そいつらの相手は頼んだぞ暁、御影」

「任しときなさい！」

「りょーかい」

俺とアリスと剣は建物の内部に入っていく。

御影達はまず負けないだろう、それには自信があるが、俺が勝たなければどうしようも無い。

建物の中は薄暗いがどうやら一直線らしく、そのまま歩いていく。

「このまま三人でいけるとベストなんだが」

「どうやら——無理なようだ」

ヒュっという風をきるような音が聞こえたと思った次の瞬間には
金属がぶつかり合う音が聞こえてきた。

前に居る剣が刀を抜いて何かを受け止めている。

眼を凝らしてみようと刃物——刀を受け止めている。

「——新手か」

「なかなか腕利きの者が居るようだな」

前の方から男の声が聞こえてくる。

どうやらその男がこちらに刀を振り下ろしてきたらしい。

「コイツは私がやる、先に行け」

「おやおや？ 女子おんな一人で私を抑えとな？」

「そのつもりだが？」

剣が切り込む、それを男は軽くないなしていくが、少しずつ俺達との距離が開いていく、

その間に俺とアリスは走ってさらに奥に向かった。

剣のことが多少心配だが、体力を消耗させるわけには行かない。

去り際に、頼むと剣につぶやいて抜けていく。

「大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だと信じるしかないな」

後ろからは激しい金属音がする、幸いまだ悲鳴やらなんやらは聞こえてこないから大丈夫なのだろう。

急ぎ足で向かっていると一つの扉が目の前に立ちはだかる。

「まさにラスボス前ですね」

「ゲームだったらセーブして一気に行くとところだけど、まあセーブ無しで一気に行かないとな」

思いっきり扉を蹴飛ばす、警戒心をマックスにしながら部屋の中に進入する。

部屋の中は先ほどとうって変わってかなり明るい。

部屋の中央部分に男が立っている。

「よく来たな」

嬉しそうに、そして悲しそうに男が笑う。

アリスを後ろの下がらせ、男と向き合う。

「負けるとわかってやるのか？」

「まだ、決定事項じゃないだろ？」

「無謀を冒すほどの馬鹿ではないと思っていたのだが、思い違いか」

「無謀かどうかはやってみないとわからないだろ？」

「テンプレートな答えだな、実につまらない」

「己を奮い立たせるのにはもってこいだろ？」

「まあ、なん

男が何かを言おうとしている瞬間に俺は走り出す。

能力を発動させる前に潰す、卑怯だろうと何だろうと関係ない。

男の腹に容赦なく拳を叩き込む、すぐさま追撃で顔面に右のハイキック、勢いを殺さず左の裏拳。

俺は間合いを取るために後方に下がる。

全て確実に当てた。

それでも男は平然と今なお立っている。

「人間の耐久力じゃねえな」

「ほめ言葉として受け取ろう」

今度は男が即効でこちらに向かってくる、回避行動に出ようとした俺の行動を無理やり男は能力で止める。

顔面へ向けた男の右拳は見えない壁に遮られる。

アリスがうまく能力でこちらを援護してくれている。

ガードはあちらに任せれば良い、なら俺はただひたすら攻めるだけ。

イミテーション
(模倣二刃)

能力発動条件の二つ名は予め前に曉たちと決めている。

これは剣の能力だ。

増えた二本の腕で男の腕を掴み、もう二本で男の腹を連続で殴る。それでも男はうめき声ひとつ漏らさずに俺の腹部に蹴りを放つてくる、それをまたアリスの盾が防いでくれる。

イミテーション
(模倣空砲)

これは入学式に御影に絡んできた男の能力。

二本の腕に大量の空気を圧縮させ男の腹に叩き込む、激しい衝撃を生み男は吹き飛び壁に激突する、壁は音を立てて崩れた。

常人ならば意識など軽く飛ぶ攻撃に対しても男は平然と立ち上がってきた。

多少のダメージは与えられたかもしれないが致命傷には全く足りない。

物理的ダメージはまず聞いていない、なら残りは炎と雷の能力があるが、それを確実に当てられるかが問題になる。

幸い今のところ相手は能力を使って行動を束縛してこないのだから

られるが、こちらが起死回生の一手をうとうとしたときに邪魔してくる可能性が高い。

「——その女が邪魔だな」

男はその一言を言い終えた瞬間に走り出す。
俺を無視しアリスの下へ。

「逃げる！」

即座に叫ぶがアリスでは反応ができない。

瞬間的に俺は御影の能力を模倣し、アリスと男の間に入る。

男の渾身の一撃が俺の腹部に直撃し吹き飛ばされる。

意識が飛び欠けそうになるのを唇を噛む事で押さえ、アリスの下へ向かおうとするが

「却下だ」

ただその一言で俺の全身が動くことをやめる、即座に違う行動をし、動きを回復させるが

それが致命的な遅れとなって、アリスに男の強烈な一撃が入る。

僅かなうめき声が聞こえ、アリスは完全に沈黙する。

「まず一人」

「てめえ……」

即座にアリスに駆け寄り気絶しているだけだと確かめ男と向き合う。

圧倒的な威圧感をこちらに向けてくる男は笑っている。

——実に愉快そうに。

「ぶっ殺す」

「できるものならな」

女性を殴って笑っているなど人としてどうかしている。

能力を三つ連続で使ったが疲れなど無い、怒りでそんなものは無視だ。

こいつを倒せばいいのだ。後々疲労が襲おうが構いはしない。

男の腹部、顔面を続けざまに殴るが全く動じない——完全に狂っている。

（痛覚が無いのかおい？）

焦る心を抑えて確実に殴っていく、時折能力を使われ動きが止まっても即座に反応し別の行動を取る。

それを繰り返しながら殴り続ける、が。

長くは続かなかった。行動を拒否され動きが鈍った瞬間を完全に捉えられ腹部に重い一撃が入る、軽く宙に浮いた体に

さらに追撃がされる。意識が飛び次の瞬間には痛みで意識が覚醒する。それを何度か繰り返す。

「ウグツ……ハ……ガア……」

全身が痛んで悶える。地面に臥した俺の背中を男は踏む。立ち上がるうにも体に力が入らない。

「情けないものだ、威勢だけは良いが、力が圧倒的に足りてない」

さげすむような眼で俺を見てくる。

「あの女もそうだ弱いくせにでしゃばるから痛い目に会う、対したこともできないのに」

無駄だということになぜ気づかずに居るのだろうな」

哀れむ様な眼でアリスを見る。ヤメロ、そんな眼であいつを見るんじゃないねえ。

「下らない理由でここに来て下らない理由で負けていく、弱者とはそういうものだ」

下らないって何がだ？　アイツの誰かの為になりたいってのが下らないのか？

「貴様も何だ？　無謀にも戦いを挑み哀れにも敗北し、何がしたかった？」

「人助けだ」

「勝てると思ったか？」

「……………」

「対した理由も無くここに来て大志を抱いた私に勝てるっても？」

「黙れ……人殺し」

「無能な凡夫を消したぐらいでなぜ怒る？」

「何の能力も持たない人間なんぞもう要らないだろう？」

「能力者が偉いつてか？」

「そうだ、我々は進化したのだよ」

「……くだらねえ妄言だな」

「黙れ！」

男が強く俺の背中を踏みしめてくる。

「たかだが変な能力が付いたぐらいで偉いだあ？ 馬鹿だろお前」
「ガキにはわからんさ、その倒れてる女もそうだ、富もあり能力もある、なのに何故、人助けなどしようとするのか」

「富があつて能力があるからだ」

「そこがわからん、何故無駄な事をする？」

「無駄じゃねえよ」

俺は四つん這いになって立ち上がろうとする。男はより強く俺の背中を踏んでくるが関係ない。

男の足を払いのけ面と向かつて対峙する。

「少なくともてめえが無駄だつて言つていいことじゃねえんだよ！」

男の胸倉を掴んで叫ぶ。足が震える、立っているのが精一杯だ。それでも倒れるわけにはいかない。他人を見下し助けることのできない最低な野郎に屈服するわけにはいかない。

「下らぬな、だがまあ心意気だけは買つてやる、名乗れ小僧」

「ああ？」

「偉大なる者に齒向かつた愚者の名を覚えておいてやると言っているんだ」

「無礼な野郎だ、先に名前を言うのが礼儀だろ？」

「減らず口を、なら答えてやる、ヴォルフ・アヴェンジャー、私こそが偉大なる者であると」

「紅花 幸也だ覚えとけ、てめえを牢獄に叩き込む男の名前だ」

言い終わつた瞬間に俺とヴォルフは同時に動き出す。掴んだ胸倉を引っ張り勢いをつけて俺はヴォルフの顔面を殴り、ヴォルフは俺の腹部を殴る。

追撃をかけるべく動いた俺を能力で止め、ヴォルフは俺の顔面を殴る。

痛みを無視して俺は殴り返す。殴り殴られを繰り返し続ける。

二発殴られては一発返す、圧倒的に不利な状況だが関係ない。

何発殴られようが倒れなければいいのだ、先に倒れなければいい。

ただそれだけだ。

「しつこいぞ小僧！」

「クタバレ爺！」

空砲、二刃、雷様、火達磨、次々に能力を連続で発動させ拒否されるのを防ぎながら攻める。

少しずつだが確実にきいている、あと少しあと少し、そう確信が持てる。

殴り殴られ、確実にヴォルフは消耗している、ヴォルフの能力とて体力を消耗するはずだ。

それを連発しているのだから疲れていて当然なはず、なら最後はどちらが最後まで気力で立っていられるかだ。

倒れた瞬間に防御も攻撃もできなくなる、立っていればまだ逆転はできる。

それだけ信じ切れそうな意識を無理やりつなぎとめる。

あいつは自分の理想でアリスの信念を馬鹿にした。

下らないと、無駄だと。

あいつの理想がどれだけ偉いのかは知らないが、アリスの信念が下らないはずは無い。

それさえ理解できぬヴォルフに負ける気などサラサラ無い。

守ると勝手ながら誓ったのだ、なら勝たなければならない。

アリスの信念を、俺の信念で守るために。

怒りと根性が全身に鞭を打つ。

何度も倒れかける体を無理やり起こし、傷ついた体の悲鳴を無視して動く。

何本か骨も折れている、それでも倒れることは許されない。
確固たる信念が在るうちは負けられない。

ヴォルフがとうとうぐらついた、俺は気合を振り絞り、渾身の一撃を顔面に叩き込む

――ハズだった。

腕が途中で止まる、拒否されたそう理解する事が瞬時にできず、俺は完全に膠着する。

そんな俺にヴォルフは勝ち誇った笑みを向けて俺の顔面目掛けて拳を振り下ろした。

(……つちくしょう)

ゲームオーバー、そんな文字が頭に過ぎった瞬間、男の拳は眼前で止まった。

何かに阻まれたように。

「今です!」

声を聴いた瞬間理解するよりも早く体が動く。
驚きを隠せないヴォルフの口を無理やり掴んで塞ぐ。

「大逆転だな」

腕は上がらない、体は限界を迎えている、それでも最後の一撃を繰り出すために体は動いた。

上がらない腕の変わりに渾身の頭突きを食らわせる、男は白目を剥いてドサツと倒れる。

それに続き俺も全身の力が抜けて倒れる。

今にも切れそうな意識の中で勝利を確信する。

アリスが駆け寄ってくる足音と御影達の声が聞こえた瞬間、俺の意識は途切れた。

眼が覚めて見えたのは真っ白な天井、またか……と心の中で思い、俺は身を起こす。

周りを見てみるとどうやら前に居た病室らしい。

そして前と同じく

「起きたんか」

全く同じセリフを言いながら会長達が入ってきた。

前と違うのは雰囲気が出るい。

「ええまあ、どれくらい寝てました？」

「丸々4日くらいやな」

前の倍か……、それでもあれだけ能力を使って無理したんだからこれぐらいですんだのはいい方だろう。

「にしても無茶しましたね」

「勝てたから万事おっけーです」

「何でそんなに無茶したのよ」

アリスも御影も心配してくれているようだが、御影よ、バシバシと体を叩かないでくれ。

真面目に痛い……。

「まあ、いいじゃん」

「アリスちゃんに惚れちまってカッコいいところ見せなくなっただか？」

耳元でこっそりと暁が言ってくる、馬鹿言えと払いのける。

「剣とかも怪我は無いみたいだな」

「ああ、全く持って何も無い」

アリスも殴られていたようだが平然としているところを見ると大丈夫なようだ。

「これで一件落着やね」

会長が満足げに言う、大変だったが終わってみると達成感がある
て悪くない。

荒事も嫌だ嫌だと思っていたがこういうのなら悪くないのかもしれない。

「こういうときに言う言葉があるよね」

「ん？」

「めでたし、めでたしってね」

「そうだな——めでたしめでたしだ」

——明日もまた今日のような平和な日であるとうにと少しばかり
願ってみた一日だった——

最終話（後書き）

最後までご愛読ありがとうございました。

中途半端な気がしたり起承転結が微妙な気がしたりと

多々反省しなければならぬ点がある作品ですが

最後まで読んでくださった方々に感謝の言葉を送ります。

なにとぞ未熟者なゆえ、つまらない話だったかもしれませんが、今後この経験を生かしてさらによりより作品を作るようにしたいと思います。

次に何か作品を投稿する場合はもっとよりよい物を

作りたいと思っています。

もしもこの先、作者の新作を見かけたら

またこいつかと思いつながら慈悲深い眼でお見守りください。

それではまた読んでもらえる事を期待しながら

最後とさせていただきます。

ご愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2084g/>

いみてーしょん

2010年10月12日01時35分発行